

佐賀県文化財調査報告書67集

直 代 遺 跡

— 三養基郡三根町 —

1983年3月

佐賀県教育委員会

佐賀県文化財調査報告書67集

ちよく 直 たい 代 遺 跡

— 三養基郡三根町 —

1983年3月

佐賀県教育委員会

は じ め に

この調査報告書は、一級河川切通川（井柳川）改修事業に先がけて、佐賀県教育委員会が昭和56年度に実施した、三養基郡三根町「直代遺跡」発掘調査の記録であります。

今回の調査は、河川改修部分だけに限られていたため、遺跡の全容を明らかにできなかったことは残念であります。中世の井戸跡、掘立柱建物跡、それに溝などの遺構や瓦器・土師器など多量の土器を発見しております。これら中世の資料は佐賀県内でも数少ないものだけに、今後とも貴重なものとして中世史の究明に資すると考えます。

ここに調査報告書を刊行することになりましたので、郷土史の研究及び文化財保護、その普及のためにご活用いただければ幸いです。

なお、この調査に終始御尽力下さった県土木部河川砂防課、三根町教育委員会並びに地元の方々に厚く感謝申し上げます。

昭和58年 3 月

佐賀県教育委員会

教育長 古 藤 浩

例 言

1. 本書は昭和56年8月26日から10月20日までに佐賀県教育委員会が、佐賀県土木部河川砂防課からの依頼で発掘調査した直代遺跡の報告書である。
2. 発掘調査は佐賀県教育委員会が実施した。
3. 本書の執筆は次のとおりである。
 - I ……………高瀬 哲郎
 - II 1.・2. ……………高瀬 哲郎
 3. ……………西田 和己・高瀬 哲郎
 - III……………高瀬 哲郎
4. 本書作成の作業分担は次のとおりである。

遺構実測……	西田 和己・本田 京子・高瀬 哲郎
遺構写真……	原口 定・西田 和己・高瀬 哲郎
遺物写真……	原口 定・古賀 栄子
遺物実測……	野口 悦子・藤原 倫子
製図…………	藤原 倫子・本田 京子
復元…………	村瀬 邦子・広滝 敏子・高畠 澄子・古川万鶴代
編集…………	高瀬 哲郎

凡 例

1. 遺構については各遺構ごとに一連番号を付し、その前にSE：井戸跡、SB：建物跡、SK：土壇、SD：溝、SS：貝層、SX：その他の遺構の分類番号を標記する。
2. 遺構の寸法数字はm単位、遺物の寸法数字はcm単位である。
3. 挿図、本文中に用いた方位はすべて磁北である。
4. 資料の保管等に関しては30頁を参照されたい。

目 次

I	調査の概要	
1.	調査に至る経過	1
2.	調査の組織	1
3.	調査日誌抄	1
II	遺 跡	
1.	遺跡の概要	2
2.	遺 構	
(1)	遺構の概要	6
(2)	井 戸 跡	6
(3)	建 物 跡	8
(4)	溝	10
(5)	貝 層	11
(6)	その他の遺構	12
3.	遺 物	
(1)	遺物の概要	12
(2)	土 師 器	12
(3)	瓦 器	18
(4)	白 磁	20
(5)	須 恵 器	22
(6)	その他の遺物	26
III	ま と め	28

挿 図 目 次

Fig. 1	直代遺跡周辺遺跡分布図	3
Fig. 2	直代遺跡調査区位置図	5
Fig. 3	直代遺跡井戸跡実測図(1)	7
Fig. 4	直代遺跡井戸跡実測図(2)	9
Fig. 5	直代遺跡建物跡実測図	10
Fig. 6	直代遺跡出土遺物実測図(1) (土師器)	13

Fig. 7	直代遺跡出土遺物実測図(2) (土師器)	15
Fig. 8	直代遺跡出土遺物実測図(3) (土師器)	17
Fig. 9	直代遺跡出土遺物実測図(4) (内黒土器・黒色土器・瓦器)	19
Fig. 10	直代遺跡出土遺物実測図(5) (瓦器・白磁)	21
Fig. 11	直代遺跡出土遺物実測図(6) (須恵器)	23
Fig. 12	直代遺跡出土遺物実測図(7) (須恵器)	25
Fig. 13	直代遺跡出土遺物実測図(8) (木製品・石製品)	27

図 面 目 次

PLAN. 1	直代遺跡遺構配置図	折り込み
---------	-----------	------

図 版 目 次

PL. 1	直代遺跡遠景、全景
PL. 2	直代遺跡 S E 01～05・08～10井戸跡
PL. 3	直代遺跡 S E 07・11・12・14～16井戸跡
PL. 4	直代遺跡 S E 01・07・09・12・14・16井戸跡遺物出土状況
PL. 5	直代遺跡 S E 16井戸跡 (井戸枠)
PL. 6	直代遺跡 S B 01・02・04建物跡
PL. 7	直代遺跡 S X 02、S K 01・02土壇
PL. 8	直代遺跡 S D 01溝
PL. 9	直代遺跡 S D 03溝、01溝 (杭列)、01溝遺物出土状況 (下駄)
PL. 10	直代遺跡 S S 02・03貝層
PL. 11	直代遺跡 S S 02・05貝層遺物出土状況
PL. 12	直代遺跡出土土師器・須恵器・瓦器
PL. 13	直代遺跡出土瓦器・白磁
PL. 14	直代遺跡出土須恵器
PL. 15	直代遺跡出土木製品・石製品

I 調査の概要

1. 調査に至る経過

佐賀県土木部河川砂防課は、昭和56・57年度に佐賀県三養基郡三根町大字東津地区で一級河川切通川（井柳川）改修工事を予定していた。しかし工事区域に近接して周知の埋蔵文化財包蔵地（神興塚貝塚、菰ノ江遺跡^{註1}）が存在していたため、佐賀県教育委員会は河川砂防課と協議を行い、昭和56年7月にまず遺跡確認の予備調査を実施した。その結果、当該地域（Fig. 2）約2,400㎡に遺構・遺物が分布していたため、佐賀県教育委員会は昭和56年8月26日～10月20日の期間に発掘調査を実施し、記録保存を行った。

2. 調査の組織

調査委託者 佐賀県土木部河川砂防課

調査受託者 佐賀県教育委員会

調査事務局 佐賀県教育委員会文化課（課長 藤山 巖）

調査員 高瀬哲郎（文化課指導主事）・西田和己（文化課文化財保護主事）・本田京子、原口 定（文化課嘱託）

調査作業員 松枝けい子・寺田三枝子・寺田夏枝・原岡トシエ・大坪久子・隈本節子・石井ハルエ・中島年江・中島トシエ・執行シズヨ・大坪ミナ・日高ツル・日高好枝・垣内マツエ・副島イツヨ・副島ツルエ・東内みづえ・竹内さつみ・常富マツエ

3. 調査日誌抄

昭和56年

- 8月26日 調査を始める。9月18日まで、ユンボで調査区の表土はぎ。
- 9月3日 作業員による遺構確認作業を始める。小穴や井戸跡らしきものが検出できる。
- 9月7日 S E 01～05井戸跡の埋土中から須恵器・瓦器等、ほぼ完形の遺物が多く出土。
- 9月8日 S E 08井戸跡から木製品出土。S E 01～05井戸跡の写真撮影。
- 9月9日 S E 09～14井戸跡、S K 01土壌の掘り下げ。その後写真撮影。
- 9月14日 調査区南半の遺構確認作業で、溝を2条検出。
- 9月16日 S D 01溝から木製品（下駄、杭など）や瓦器が出土。
- 9月18日 表土はぎの段階で残しておいた貝層を写真撮影後、掘り下げる。
- 9月29日 貝層の掘り下げをほぼ終了。調査中央西側で、掘立柱建物跡を検出。
- 10月1日 調査区北半が冠水、湧水のため遺構確認作業がなかなか進まない。
- 10月2日 S E 16井戸跡（木枠有り）の掘り下げ。
- 10月5日 雨が9日まで続き、作業中止。
- 10月12日 ほぼ発掘作業を終わり、遺構の実測を始める。
- 10月17日 S E 16の井戸木枠を取り上げる。
- 10月20日 調査を終了し、撤収。

註1 川崎吉剛他「菰ノ江遺跡」三根町文化財調査報告書第1集 三根町教育委員会 1981

II 遺 跡

1. 遺跡の概要

直代遺跡は三養基郡三根町大字東津字直代に存在している。三根町は低平な佐賀平野の東部に位置し、東は筑後川を挟んで福岡県と接する。一帯は筑後川や切通川の土砂運搬作用や有明海の干満差の大きい潮汐作用などによる、長い年月の堆積で形成された沖積平野であるため、現在においても集落は微高地を中心にして点在しているという状況である。しかし、これら微高地にしても標高が3～4 mほどしかなく、この地域では複雑に入り込んだクリークが生活上重要なものとなっている。

さて、この有明海に面した低平地域であるという状況を考えてみた場合、原始・古代の人々にとっては今にも増してかなり大きな影響が加わったようである。それは、遺跡の分布に端的に現われている (Fig. 1)。

まず旧石器、縄文時代の遺跡であるが、有明海北側沿岸部には存在していない。これらの時期の遺跡は、脊振山地南麓裾の低丘陵地に点々と分布している。これは、縄文時代の海進、海退現象からみて、中期には標高4 mあたりまで海が進んでおり、三根町周辺がまだ陸化していなかったためと考えられる。

しかし、弥生時代になると三根町本分貝塚^{註2}、持丸貝塚、千代田町詫田(西分)貝塚^{註3}、姉貝塚、神埼町荒堅目貝塚などの貝塚がみられ、海退現象による陸化が進んで、かなり弥生人の定着が始まったようである。本分、詫田(西分)貝塚などは、特にその分布する面積も広大で、またかきや蛤などの貝類の堆積も1 m近くあり、貝層がかなり厚く、長期間にわたる採集が考えられる。昭和56年3月、佐賀県立博物館が行った本分貝塚の調査では、筒型器台や弥生土器が多数出土している。昭和57年の詫田(西分)貝塚の調査では、銅鐸型土製品や木製品なども出土している。ただこの地域の問題としては、これら遺物、遺構の豊富さからみて、かなりの規模の集落を形成していたと考えられるが、いまだにその跡を確認できていないことである。佐賀平野での丘陵部の集落の様子が東脊振村西石動遺跡^{註4}、下石動遺跡^{註5}、中原町姫方原遺跡^{註6}、鳥栖市柚比遺跡^{註7}など多くの調査例により次第に明らかにされつつあるのに比べ、有明海北側沿岸部のその解明は今後の課題として残る。

古墳時代の遺跡は、三根町一帯では現在のところ発見されていない。これは、この地域だけでなく沿岸部全体にみられる現象のようである。とすれば、遺跡の分布からみて、弥生時代に相当規模の遺跡が存在していたにもかかわらず、古墳時代に入ると急速にこの地域が衰退していったとみなければならないようである。そうであるならばそれはこの時代に丘陵部を中心に



Fig. 1 直代遺跡周辺分布図

- | | | |
|-----------|----------|----------|
| ① 目達原古墳群 | ⑩ 杏の木貝塚 | ⑲ 詫田西分貝塚 |
| ② 塔の塚廃寺跡 | ⑪ 南里ヶ里遺跡 | ⑳ 上地貝塚 |
| ③ 下中杖遺跡 | ⑫ 高志神社貝塚 | ㉑ 柳島遺跡 |
| ④ 東津一本松遺跡 | ⑬ 南里ヶ里貝塚 | ㉒ 向島遺跡 |
| ⑤ 東津二本楠遺跡 | ⑭ 土居内遺跡 | ㉓ 経塚貝塚 |
| ⑥ 本分貝塚 | ⑮ 藤木西分遺跡 | ㉔ 菰ノ江遺跡 |
| ⑦ かけ塚貝塚 | ⑯ 又南里遺跡 | ● 直代遺跡 |
| ⑧ 荒堅目貝塚 | ⑰ 藤木東分遺跡 | |
| ⑨ 下藤貝塚 | ⑱ 神輿塚貝塚 | |

展開された古代豪族の発生や盛衰とあながち無関係とも思えない。沿岸部の人々は古代豪族の下に組み込まれ続けたのかもしれない。現在、佐賀平野の主要な古墳の南限は、上峰村目達原古墳群、佐賀市上九郎古墳(？)、大和町道善寺古墳、風楽寺南古墳などであり、沿岸部よりもかなり北方の、丘陵部寄りに存在している。ただ、菰ノ江遺跡、詫田貝塚そして今回の調査区から、遺構に伴ってはいないが、古墳時代後期の遺物が多少出土している。

飛鳥～平安時代にかけての遺跡も少ない。千代田町詫田西分遺跡、又南里遺跡、柴尾遺跡など、点々とみられる程度である。ただ、三根町市武に一、三、四坪、直代に三、十坪などの地名が残っていることから、条里制がこの地域で行われていたようである。この時期の県内の主な遺跡をみてもこれら平野部の条里制の他は、大和町大願寺廃寺跡、国分寺跡、肥前国府跡、小城町晴気廃寺跡、東脊振村辛上廃寺跡、上峰村塔の塚廃寺跡など寺院跡や官衙跡が中心であり、集落跡などの生活遺構に関連した遺跡は少ない。

中世に入ると再びこの地域では遺跡が多く分布してみられるが、これらの遺跡は微高地域を中心として存在している。分布域としては、弥生時代と同様のところを選んでいるため、弥生時代の遺跡と重複することも多い。この時期以降の平野部の遺跡の特徴としては、堀（環濠）を利用して造った館跡（城跡）がある。例えば、三根町西島城跡、神埼町姉川城跡、千代田町直島城跡など、各地に点々とみられるが、これらは中世に激化してくる、「土地」をめぐる争いの中で生きてきた人々の生活遺構として注目される。

さて、このような地理的、歴史的環境のなかで、平野部の遺跡のひとつである直代遺跡は、井柳川の下流左岸域に位置しているが、やはり一帯の標高が3 m前後でかなり低平であることや、また有明海へ流れ込む筑後川河口に近く、満潮時には川の水位もかなり高くなることから、遺跡はその影響を強く受けていたようである。特に調査地点は、現在集落の存在する微高地から東へ離れたところで、常に湿地状態であった（Fig. 2、PL. 1）。そして、このことは遺構の性格にも作用しているとみられ、当調査では16基の井戸跡、3条の溝、4棟の掘立柱建物跡などを確認している。遺物は井戸跡埋土中からの出土が主で、瓦器、土師器、須恵器などの完形品が多い。これらから、直代遺跡の時期は古墳時代～鎌倉時代にわたっていると考えられる。

以下はその詳細である。

註2 志佐惲彦他「本分貝塚」佐賀県立博物館調査研究第7集 佐賀県立博物館 1981

註3 1982年、佐賀県教育委員会調査

註4 堤安信「九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査概報 第4集」佐賀県教育委員会 1981

註5 註4に同じ

註6 田平徳栄「姫原遺跡」中原町文化財調査報告書第3集 中原町教育委員会 1979

註7 石橋新次「柚比遺跡群範囲確認調査第3年次概要報告書」鳥栖市文化財調査報告書第7集 鳥栖市教育委員会 1980

註8 拙稿「大門西遺跡」佐賀県文化財調査報告書第51集 佐賀県教育委員会 1980

註9 松尾禎作「目達原古墳群調査報告」佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告 第九輯 1949



Fig. 2 直代遺跡調査区位置図

2. 遺 構

(1)遺構の概要

幅約30m、長さ約80mの南北に延びた調査区のなかで確認された遺構は、井戸跡16基、掘立柱建物跡4棟、溝3条、土壇2基、貝層8ヵ所、その他の遺構2の計35である（PLAN. 1）。

貝層を除く他の遺構は、表土下0.3m～0.4mの深さの青灰色粘土層から掘り込まれている。埋土は大概灰黒色土である。また貝層は青灰色粘土層より0.2mほど上層の灰黒色土層中に広がっている。

遺構は、全体的にみて調査区南半に多く分布している。特に井戸跡はS E 16を除き、南半に集中している。掘立柱建物跡は、軸方向もそれぞれ異なり、規則性はみられない。全て小規模である。貝層はさほど厚くなく、点々と散乱しているという状況である。溝ではS D 01が深く、長いだけで他の2条の溝は浅く、短い。S D 01溝には杭列も残っていた。

(2)井戸跡（Fig. 3・4、PL. 2・3）

16基のうち、S E 12・16の2基だけが割り貫きの木杵をもち、他はすべて素掘りである。掘り形には単掘りと二段掘りがある。深さ0.5mほどで湧水を見る。埋土中からは、須恵器・土師器・瓦器・木製品などが出土しているが、完形品（特に瓦器の椀）が特に多い。井戸の底には全て達し得なかった。

S E 01井戸跡（Fig. 4、PL. 2-1） 調査区中央やや南側に位置する。掘り形は円形である。上面の直径2.25mであるが、深さ0.4mで直径1.65mにすぼまる。深さ2.25m以上。土師器杯蓋（Fig. 8-22）、須恵器杯蓋（Fig. 11-85、PL. 14）が出土。

S E 02井戸跡（Fig. 4、PL. 2-2） 調査区中央やや西側に位置する。掘り形はややいびつな円形である。S E 01井戸跡と同じように、上面の直径3.3mであるが、深さ0.75mで直径2.05mにすぼまる。深さ2.80m以上。土師器小皿（Fig. 8-43）、石鍋、瓦器椀が出土。

S E 03井戸跡（Fig. 4、PL. 2-3） S E 02井戸跡の西2.5mのところに位置する。掘り形はほぼ正円形である。上面の直径1.90m、深さ2.0m以上。瓦器椀（Fig. 10-68、PL. 13）が出土。

S E 04井戸跡（PL. 2-4） 調査区中央、S S 05貝層のすぐ南に位置する。掘り形は楕円形で、上面の長径2.80m、短径2.45m、深さ2.65m以上。深くなるに従って、径がかなり小さくなる。土師器甕（Fig. 6-2）、瓦器椀が出土。

S E 05井戸跡（PL. 2-5） 調査区中央やや西側、S E 02井戸跡とS S 04貝層の間に位置する。掘り形はほぼ円形で、上面の直径2.20m、深さ2.30m以上。上面の周囲が、西側を除き、0.1～0.2mほど下がる。埋土の上層から瓦器椀（Fig. 9-59、PL. 13）下層から須恵器杯

(Fig. 11-86, PL. 14)、短頸壺 (Fig. 11-92, PL. 14) が出土。

S E 06井戸跡 調査区中央両端に位置する。二段掘りである。掘り形は楕円形で、一段目の上面の長径3.35m、短径3.20m。そして、深さ1.05mで段がつく。二段目の長径2.35m、短径2.15m。深さ2.25m以上。土師器小皿 (Fig. 8-36・37)、瓦器碗 (Fig. 10-65, PL. 1) が出土。

S E 07井戸跡 (Fig. 3, PL. 3-1) 調査区中央やや東側、S S 06貝層のすぐ東に位置する。南のS E 12井戸跡を切る。掘り形は楕円形で、上面の長径2.15m、短径1.95m、深さ1.85m以上。深くなるに従って、径がやや小さくなる。土師器杯 (Fig. 8-32, PL. 12)、小皿 (Fig. 8-39・40)、瓦器碗 (Fig. 9-60, PL. 13)、それに焼けた木材が出土。

S E 08井戸跡 (Fig. 4, PL. 2-6) 調査区中央西端、S E 06井戸跡のすぐ北西に位置する。掘り形は円形で、上面の直径4.25mと、S E 11井戸跡とともにかなり大きい。しかし、深くなるに従って、径が小さくなり、深さ3.70mでは直径2.15mと、上面の直径の半分ほどになる。瓦器小皿 (Fig. 9-54, PL. 12)、碗 (Fig. 9-62, 10-66)、杓 (Fig. 13-100, PL. 15)、板片、植物の種子が出土。

S E 09井戸跡 (Fig. 4, PL. 2-7) 調査区中央やや北東に位置する。掘り形は円形で、上面の直径1.40m、深さ1.45m以上。小さい。土師器杯 (Fig. 8-30)、小皿 (Fig. 8-44)、瓦器碗 (Fig. 9-58, PL. 13) が出土。

S E 10井戸跡 (PL. 2-8) 調査区中央西端、S B 01建物跡のすぐ西に位置する。掘り形はややいびつな円形で、上面の直径2.70m、深さ1.95m以上。深くなるに従って、直径がやや

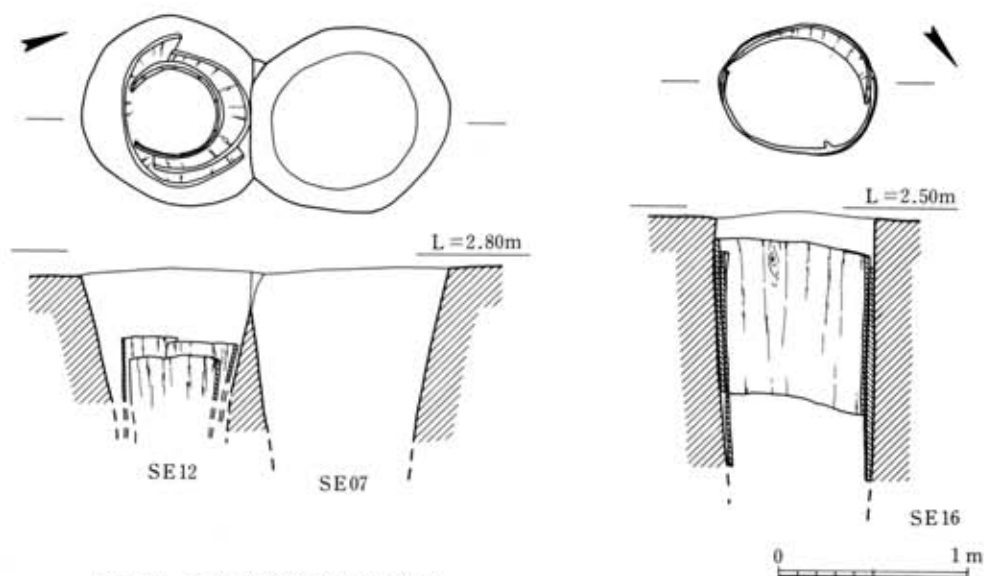


Fig. 3 直代遺跡井戸跡実測図(1)

小さくなる。土師器小皿 (Fig. 8-38・42, PL. 12)、須恵器大甕 (Fig. 12-96)、瓦器碗 (Fig. 10-64, PL. 13)、石鍋 (Fig. 13-103) が出土。

S E 11井戸跡 (Fig. 4、PL. 3-2) 調査区中央西端、S E 10井戸跡のすぐ南に位置する。浅い二段掘りである。掘り形は楕円形で、一段目の上面の長径4.80m、短径4.70m。そして、深さ0.35mで段がつく。二段目の長径3.10m、短径2.75m。深さ1.85m以上。土師器甕 (Fig. 6-4)、須恵器杯 (Fig. 11-88) が出土。

S E 12井戸跡 (Fig. 3、PL. 3-1) 調査区中央やや東側に位置する。S E 07井戸跡に切られる。掘り形は円形で、上面の直径2.0m、深さ1.45m以上。井戸穴の内側に割り貫きの木杵をもつ。木杵は、直径1.0~1.65mの材を輪切りにして、さらにほぼ半裁したものを割り貫き、三重に組み合わせている。厚さ5cm。黒色土器 (Fig. 9-49)、須恵器杯 (Fig. 11-89, PL. 14) が出土。

S E 13井戸跡 調査区北西端、S S 07貝層のすぐ南に位置する。掘り形は円形で、上面の直径1.75m、深さ1.95m以上。穴はほぼ垂直である。黒色土器杯 (Fig. 9-51, PL. 12)、瓦器碗 (Fig. 9-56, PL. 13) が出土。

S E 14井戸跡 (PL. 3-3) 調査区南側中央、S S 02貝層のすぐ東に位置する。掘り形はほぼ正円形で、S E 03・13井戸跡と形状が似る。上面の直径1.70m、深さ2.30m以上。瓦器碗 (Fig. 10-69, PL. 13) が出土。

S E 15井戸跡 (Fig. 4、PL. 3-4) 調査区南西端、S S 02貝層のすぐ西に位置する。二段掘りである。掘り形は楕円形で、一段目の上面の長径2.95m、短径2.10m。そして、深さ0.7mで段がつく。二段目の長径1.90m、短径1.70m。深さ2.65m以上。内黒土器、石鍋が出土。

S E 16井戸跡 (Fig. 3、PL. 3-5) 調査区北側中央、S B 04建物跡のすぐ東に位置する。掘り形はほぼ円形で、上面の直径1.70m、深さ2.80m以上。井戸穴の内側に、S E 12井戸跡と同じように割り貫きの木杵をもつ。木杵は、直径1.65mの材を輪切りにして、さらに半裁したものを割り貫き、その半裁部を0.3mほど互いに重ねている。そして、その重なりの方を防ぐため、半裁部の一部に抉り (PL. 5-3) を入れ、楔で固定している。土師質の土器大甕 (Fig. 7-21)、木製品 (Fig. 13-98・99, PL. 15) が出土。

(3)建物跡 (Fig. 5、PL. 6)

4棟のうち、S B 02建物跡だけが総柱である。柱の掘り形はすべて円形である。柱根は各建物跡のうち1~2個しか残っていない。建物の軸方向はすべて異なる。

S B 01建物跡 調査区中央やや北に位置する。南北軸は磁北に対し東に29度15分傾いている。1間×2間 (3.14m×3.02m)で、柱間は梁行3.14m、桁行1.51m。柱掘り形は円形で、直径0.5~0.7m、深さ約0.75m。西側柱列の南柱穴にわずかに柱根が残る。

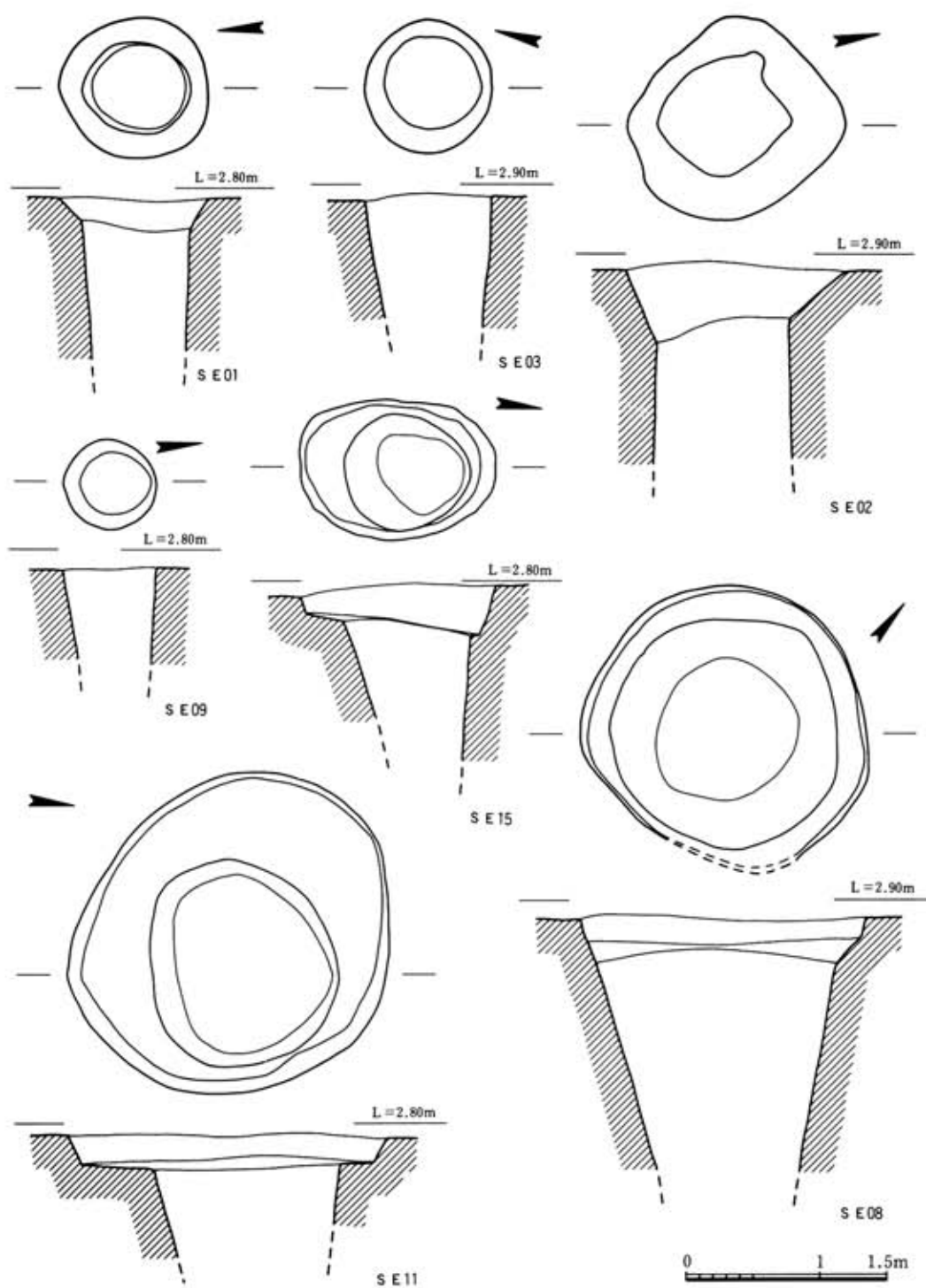


Fig. 4 直代遺跡井戸跡実測図(2)

S B 02建物跡 調査区ほぼ中央に位置する。南北軸は磁北に対し東に20度30分傾いている。2間×2間(3.10m×3.12m)の総柱建物跡である。柱間は梁行1.65m、桁行1.66mで、ほぼ同じ。柱掘り形は円形で、直径0.4~0.7m、深さ約0.55m。西側柱列の中央柱穴にわずかに柱根が残る。総柱であるところからみて、倉庫跡と考えられる。

S B 03建物跡 調査区中央西端に位置する。区域外に延びると考えられたため、一部拡大したが、柱穴は現在確認している4個以外に検出できなかった。柱穴の並び方や形状から、一応建物跡とする。

S B 04建物跡 調査区北側中央、S E 16井戸跡のすぐ西に位置する。南北軸は磁北に対し東に39度15分傾いている。1間×3間(4.74m×5.41m)で、柱間は梁行4.74m、桁行1.80m。柱掘り形は円形で、直径0.3~0.5m、深さ約0.55m。北側柱列の中央西柱穴と南側柱列の西柱穴にわずかに柱根が残る。

(4)溝 (PLAN. 1、PL. 8・9)

3条の溝のうち、S D 01・02溝が切り合う。S D 01溝がS D 02溝を切るが、その切り合いはあまり明瞭ではない。S D 01・03溝は区域外へ延びる。

S D 01溝 調査区南東隅に位置す

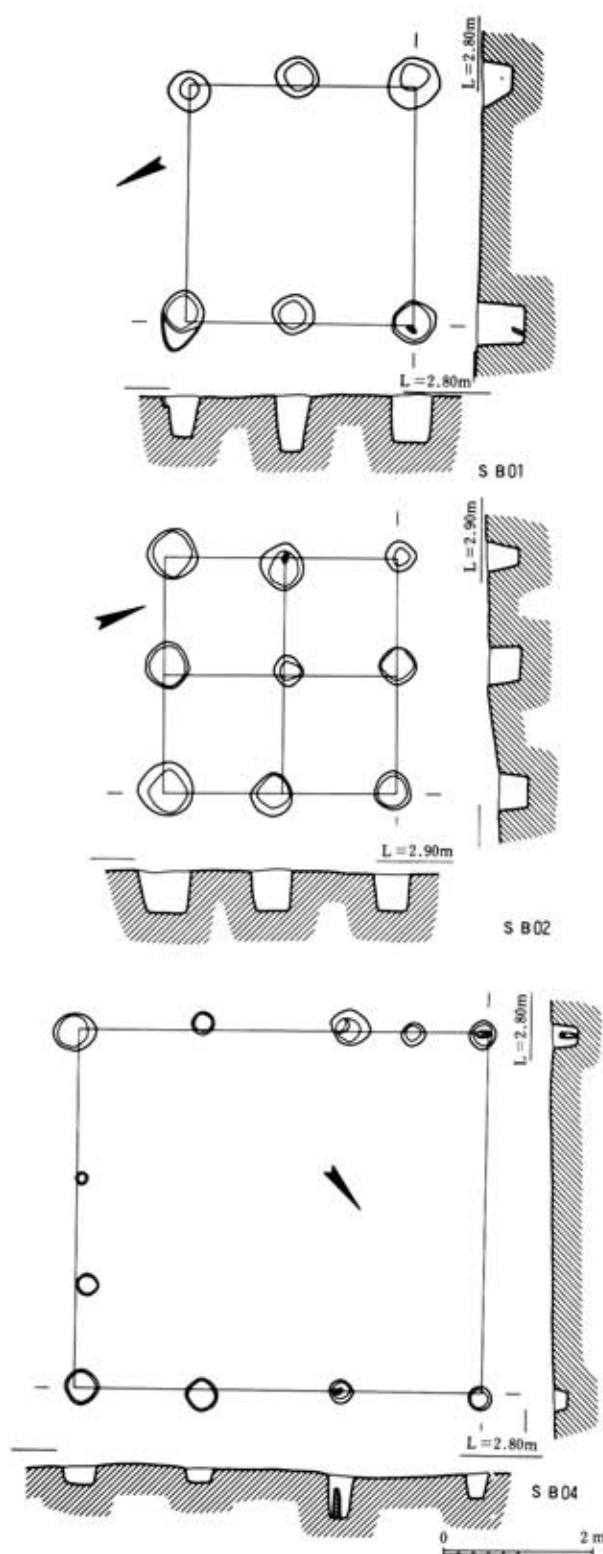


Fig. 5 直代遺跡建物跡実測図

る。方向は北東—南西方向である。溝の幅2.0m、深さ0.6mで、溝底は北へ向かって少し低くなる。断面は側壁が垂直なU字形。中央部に、溝を横切るかたちで杭列がみられる。土師器杯 (Fig. 8-35)、瓦器小皿 (Fig. 9-52)、椀 (Fig. 9-55・57・61、10-67・70、PL. 12)、白磁 (Fig. 10-71・72・74~76、PL. 13)、下駄 (Fig. 13-97、PL. 15) が出土。

S D02溝 調査区南東に位置し、東端をS D01溝に切られる。方向は北西—南東方向である。溝の幅1.10m、深さ0.25m前後で、溝底は東へ向かって低くなる。また西端は西方へ延びず、切れる。白磁 (Fig. 10-77) が出土。

S D03溝 調査区北東隅に位置する。S D02溝とほぼ同じ方向に走る。溝の幅1.30m、深さ0.3m前後で、溝底は東へ向かって低くなる。溝の西端は切れる。土師器器台 (Fig. 7-19、PL. 12)、杯 (Fig. 8-33)、小皿 (Fig. 8-41)、須恵器杯蓋 (Fig. 11-82) が出土。

(5)貝層 (PLAN. 1、PL. 10・11)

調査区全体にカキや赤貝などの散布がみられたが、特に密集していたのはS S01~08貝層の8ヵ所である。しかし、これらの場所でも貝層は0.2mほどしかなく、貝の堆積はあまりない。動物骨が少し含まれる。

S S01貝層 調査区南東、S D02溝西端に位置するが、S D02溝より古い。範囲は1.50m×5.0m。貝層の下面はやや凹む。土師器甕 (Fig. 6-10)、杯 (Fig. 8-34)、椀 (Fig. 9-45)、黒色土器 (Fig. 9-50) が出土。

S S02貝層 調査区南西、S E14井戸跡の西方に位置する。範囲は1.90m×8.0m。内黒土器椀 (Fig. 9-47・48)、須恵器大甕 (Fig. 12-93、PL. 14)、土師質羽釜 (Fig. 7-20) が出土。

S S03貝層 調査区中央やや南側に位置する。範囲は2.0m×2.0mで狭い。土師器甕 (Fig. 7-14)、杯 (Fig. 8-25・26)、須恵器甕 (Fig. 11-91、12-95、PL. 14) が出土。

S S04貝層 調査区西端、S S03貝層の西に位置する。範囲は区域外まで広がる。土師器甕 (Fig. 6-6)、須恵器杯 (Fig. 11-87) が出土。

S S05貝層 調査区中央に位置し、5.50m×12.30mと最も範囲が広い。土師器甕 (Fig. 6-5)、壺 (Fig. 7-12・16)、高杯 (Fig. 7-18)、杯蓋 (Fig. 8-23)、須恵器杯蓋 (Fig. 11-78、PL. 14)、平瓶 (Fig. 11-90、PL. 14)、石庖丁 (Fig. 13-102、PL. 15) が出土。

S S06貝層 調査区中央東側、S B02建物跡の東に位置する。須恵器杯蓋 (Fig. 11-80) が出土。

S S07貝層 調査区北西端に位置する。範囲は区域外まで広がる。土師器甕 (Fig. 6-1・11)、杯 (Fig. 8-24) が出土。

S S08貝層 調査区北東端に位置する。範囲は区域外まで広がる。

(6)その他の遺構

調査区では以上の遺構のほかにSK01・02土壌、不整形な形をしたSX01・02、それに多数の小穴を検出した。しかし、それらの遺構の性格は明らかにできなかった。

3. 遺 物

(1)遺物の概要

調査区から出土した遺物は土師器、須恵器、瓦器、白磁、土錘、石製品（石庖丁、砥石、石鍋）、木製品（下駄、杓など）、それに動物骨である。

最も出土量が多いのは瓦器で、土師器がそれに次ぐ。瓦器は井戸跡、土師器も井戸跡、それに貝層中やSX01からの出土が多い。須恵器は貝層中、白磁はSD01溝からが多い。木製品は井戸跡と溝からわずかに発見されただけである。動物骨も貝層中から数点発見されただけであるが、一部に削痕があるものもみられた。ほとんどの遺物は一部欠損か破片であるが、井戸跡から出土する土器類は、完形品が多い。特に瓦器に多い。

周辺遺跡（貝塚）からは弥生土器も多量に出土しているが、当調査区ではみられない。当調査区から出土した遺物は、古墳時代後期から鎌倉時代までのものが中心である。

(2)土師器 (Fig. 6～9-51、PL. 12)

これらのなかで内黒土器と黒色土器を区別して取り扱う。壺・甕・高杯・杯・小皿・碗などがある。

壺 (Fig. 6-1～6、7-12～17)

大型のもの（1～6）、小型のもの（12～16）、長頸のもの（17）がある。17以外はいずれも、「く」字形の口縁部に大きく膨らむ胴部がつくものである。

1・2は3～6に比べて、頸部の屈曲が強く、「く」字形である。また、1～3は4～6に比べて口縁部から頸部までが長い。1は口縁端部がやや内湾する。復元口径18.4cm、SS07貝層出土。2は頸部の屈曲は強いが、胴部はさほど丸みをもたない。復元口径20.8cm、SE04井戸跡出土。3は頸部の屈曲が弱く、胴部にかけてなだらかに曲がる。器壁がやや薄い。復元口径23.2cm、SS05貝層出土。4は短く外反する口縁部に丸みをもつ胴部がつく。頸部内面が角張る。復元口径18.8cm、SE11井戸跡出土。5は4とほぼ同じ形であるが、口縁端部がやや内湾する。復元口径17.6cm、SS05貝層出土。6は最も口縁部が短い。器壁は厚い。復元口径16.2cm、SS04貝層出土。1～6すべて、口縁部内外面ともヨコナデ、胴部外面はハケメ、内面はヘラケズリである。また4の胴部内面はヘラケズリ後ナデ。

12はやや上外方に開く口縁部に、丸みをもつ胴部がつく。口縁端部はさらに外反する。復元口径9.8cm、SS05貝層出土。13は3を小さくした形をとる。胴部の器壁は厚い。復元口径11.6cm、表土出土。14は短く外反する口縁部に下外方にあまり丸みをもたずのびる胴部がつく。頸

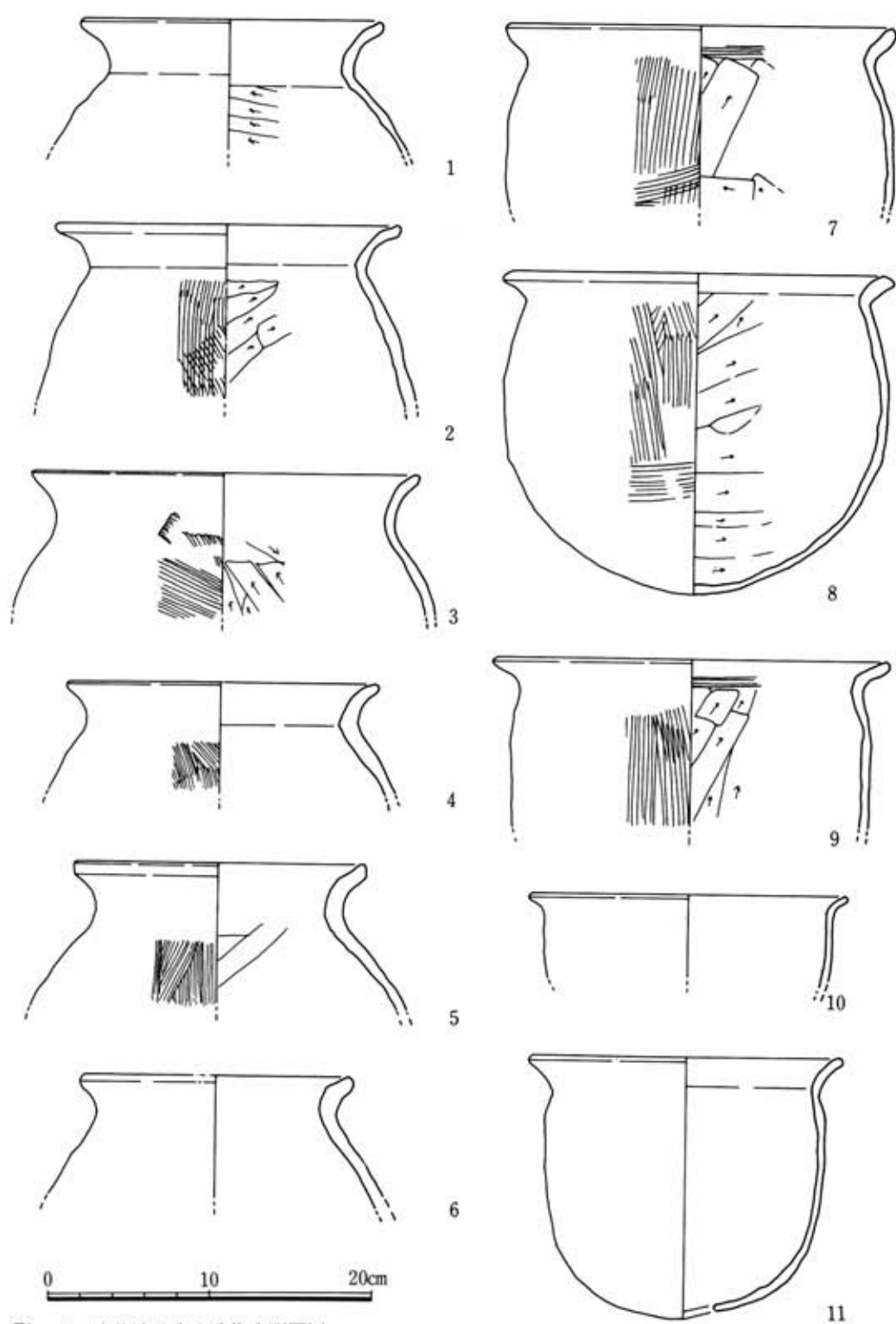


Fig. 6 直代遺跡出土遺物実測図(1)

部の屈曲はあまりない。復元口径12.4cm、S S 03貝層出土。15は小型丸底壺である。上外方にやや開き外反する口縁部に球形の胴部がつく。底部に近いほど、器壁が厚くなる。口径8.0cm、器高8.8cm、表土出土。16は胴部片であるが、口縁部は同じく上外方へ開くようである。S S 05貝層出土。15の調整は壁面の剥落がひどく不明であるが、他は大型の壺と同じ調整である。

17は長頸壺の頸部片である。上外方へ直線的に長くのび、口縁端部で丸くおさまる。外面は丹塗り磨研、内面はヨコナデ。復元口径8.4cm。

甕 (Fig. 6-7~11)

口径と胴部最大径がほぼ同じもの(7・8)、胴部最大径の方が小さいもの(9~11)がある。

7は上外方にやや内湾ぎみにのびた口縁部に丸みをもつ胴部がつく。頸部は「く」字形である。胴部外面はハケメ、内面はヘラケズリ、口縁部内外面ともヨコナデ、頸部内面にハケメ。復元口径23.4cm、S X 01出土。8は上外方に短く外反する口縁部に球形の胴部がつく。底部は丸みをもつ。頸部の屈曲は強い。体部外面はハケメ、内面はヘラケズリ、口縁部内外面ともヨコナデ。口径22.6cm、器高19.8cm、S X 01出土。9は上外方にまっすぐのびた口縁部に下方にあまり丸みをもたず直線的に続く胴部がつく。頸部の屈曲は7や8ほど強くない。胴部外面はハケメ、内面はヘラケズリ、口縁部はヨコナデ。頸部内面はハケメ。復元口径23.6cm、S X 01出土。10は上外方に外反ぎみにのびた口縁部に下内方に内湾しながら続く胴部をもつ。頸部は曲線的である。胴部内面はヘラケズリ、他はヨコナデ。復元口径19.2cm、S S 01貝層出土。11は上外方に長く外反する口縁部に下方に直線的にのびる胴部がつく。胴部下半で大きく内側に曲がり、底部は丸くおさまる。頸部は10と同じく曲線的である。体部外面はハケメ、内面はヘラケズリ後ナデ、口縁部はヨコナデ。口径18.8cm、器高16.1cm、S S 07貝層出土。

高杯 (Fig. 7-18)

18は高杯の杯部である。上外方にゆるやかに内湾しながらのびた底部からさらに上外方に屈曲する体部がつく。体部はやや外反ぎみであるが、口縁端部は逆にやや内湾しておさまる。体部と底部の接合部は稜をもつ。底部外面はヘラケズリ、内面はナデ、体部は内外面ともヨコナデ。復元口径13.6cm、S S 05貝層出土。

器台 (Fig. 7-19)

19は器台であるが、脚端部を欠く。杯底部から体部にかけて、上外方にゆるやかに内湾しながらのびる。口縁端部は体部から大きく外方へ屈曲し短くおさまる。器壁は厚い。脚部は下外方にまっすぐのびる。杯部との境は強く屈曲する。また杯底部中央に直径0.8cmの孔をもつ。脚部外面はナデ、内面はハケメ、体部は内外面ともナデ、口縁部はヨコナデ。復元口径8.6cm、S D 03出土。

羽釜 (Fig. 7-20)

20は土師質の羽釜である。口縁部からほぼまっすぐに下方にのびた体部がつき、口縁下に把手

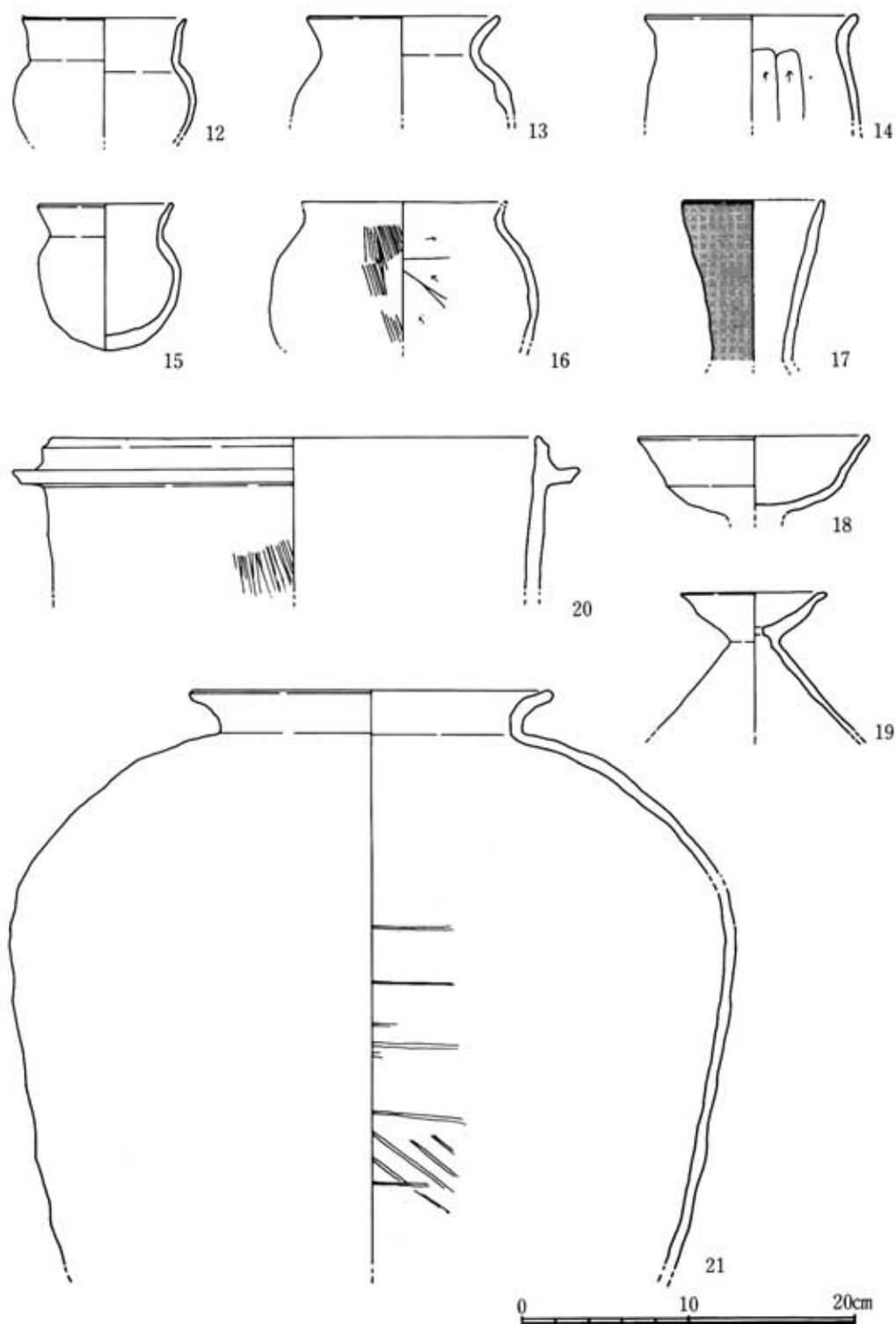


Fig. 7 直代遺跡出土遺物実測図(2)

がめぐる。体部外面はハケメ、内面はナデ、口縁部はヨコナデ。復元口径29.4cm、SS02貝層出土。

大甕 (Fig. 7-21)

21は土師質の大甕である。上外方に大きく外反する口縁部に下外方に大きく内湾しながら開く胴部がつく。胴部最大径は中位よりやや上で、そこから胴部下半にかけては、下内方にむかって直線的におさまる。底部は欠く。胴部内面はヘラケズリ後ナデ、他は剥落がひどく不明。口径21.4cm、SE16井戸跡出土。

杯蓋 (Fig. 8-22・23)

22は天井部が平坦で、口縁部はやや開き、端部は丸みをもつ。天井部はヘラケズリ、内面は不定方向のナデ、口縁部はヨコナデである。復元口径14cm、器高3.8cm、SE01井戸跡出土。23は天井部がやや丸みを持ち、体部までゆるやかにのびる。天井部はヘラケズリ、内面はナデ、口縁部はヨコナデである。復元口径13.2cm、器高4.3cm、SS05貝層出土。

杯 (Fig. 8-24~35)

須恵器の杯を模したもの(24・25)、底部が丸みを帯び深いもの(26・27)、平底に直線的に開く体部がつくもの(28~35)がある。

24・25は立ち上がり部に相違があり、24はやや内傾するのに対し、25はやや外反気味である。24・25とも底部はヘラケズリ、口縁部はヨコナデ、底部内面はナデである。24は復元口径13.4cm、器高4.2cm、SS07貝層出土。25は復元口径11.4cm、器高4.2cm、SS03貝層出土。

26は丸みをもつ体部にやや外反する口縁部がつく。底部および体部外面はヘラケズリ、口縁部ヨコナデ、底部内面はナデである。口径14cm、器高7.9cm、SS03貝層出土。27は口縁部が垂直に立ち上がる。口縁部はヨコナデ、他はナデである。復元口径11.7cm、器高5.8cm、表土出土。

28・29は平底に短く開く体部がつき、器高が低い。口縁部はヨコナデ、底部内面はヨコナデとナデ、外面はヘラ切り離しである。28は復元口径13.6cm、器高1.5cm、29は復元口径15cm、器高1.4cm。ともにSX01出土。30~33は底部と体部の境が明瞭でない。30はやや丸みを帯びた底部に直に立ち上がる口縁部がつく。口縁部はヨコナデ、他はナデである。復元口径12.6cm、器高2.5cm、SE09井戸跡出土。31~33はやや内湾しながら立ち上がる体部がつき、31・32は口縁端部がわずかに外反する。32はヘラ切り離し、31・33は不明瞭であるがヘラ切り離しと考えられる。31・32は板状圧痕が残る。31は復元口径15.6cm、器高3.4cm、SX01出土。32は復元口径15.4cm、器高3cm、SE07井戸跡出土。33は復元口径16.2cm、器高3.1cm、SD03溝出土。34・35は底部と体部の境は明瞭で、34はヘラ切り離し、35は糸切り離しである。体部内外面ヨコナデ、底部内面はナデである。34は復元口径13.8cm、器高4.1cm、板状圧痕が残る。SS01貝層出土。35は復元口径15.2cm、器高2.7cm、SD01溝出土。

小皿 (Fig. 8-36~44)

平底に短く開く体部がつくもので、ヘラ切り離しのもの(36~41)と糸切り離しのもの(32~44)

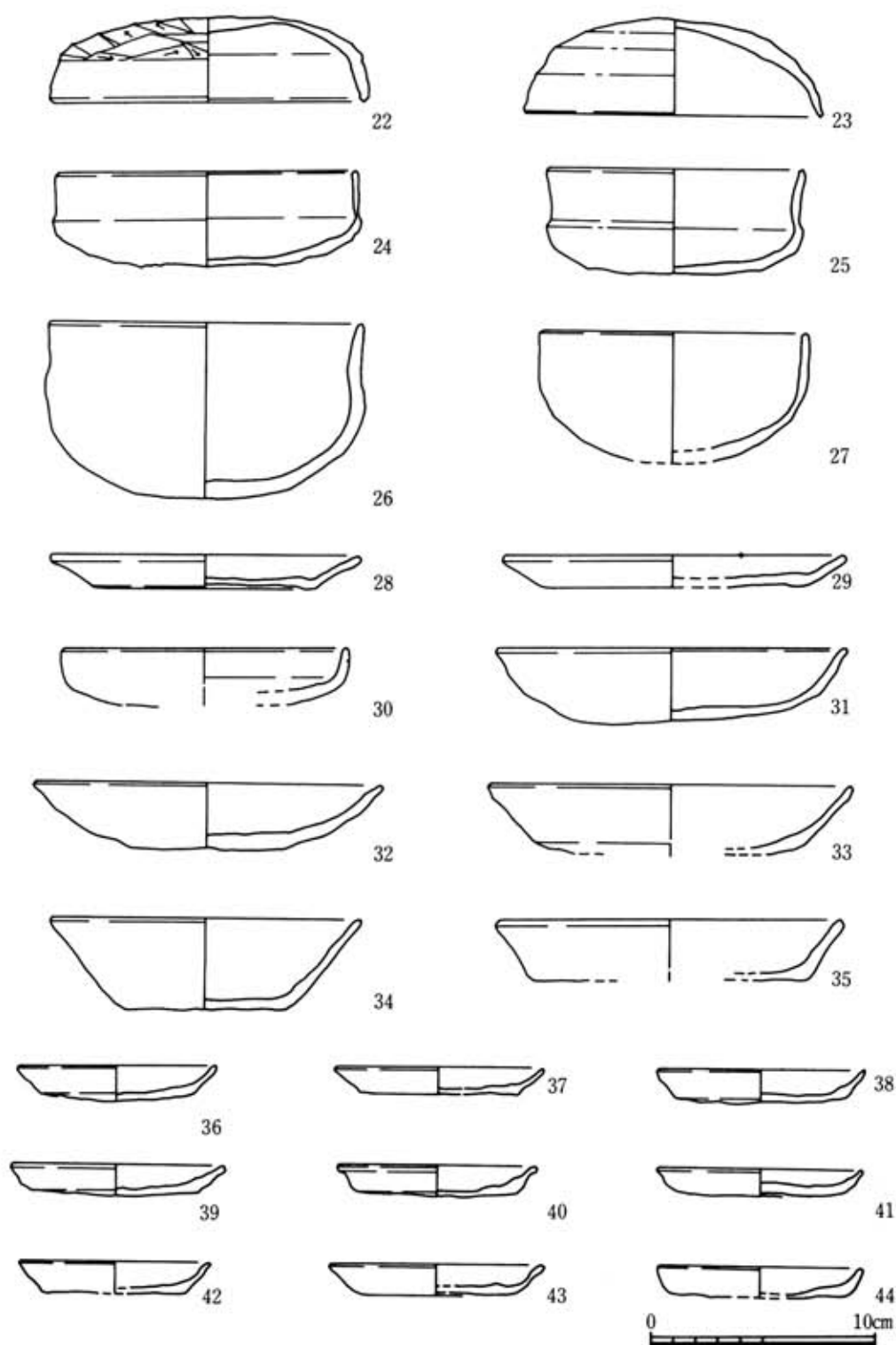


Fig. 8 直代遺跡出土遺物実測図(3)

に分けられるが、量・形態的にはほとんど差異がない。体部はヨコナデ、底部内面はナデで、ヘラ切り離しのものには板状圧痕が残るが、糸切り離しのものにはみられない。36は復元口径8.8cm、器高1.6cm、37は復元口径9.2cm、器高1.2cm、36・37ともS E 06井戸跡出土。38は復元口径9.2cm、器高1.6cm、S E 10井戸跡出土。39は口径9.5cm、器高1.4cm、40は復元口径8.8cm、器高1.4cm、39・40ともS E 07井戸跡出土。41は口径9.2cm、器高1.2cm、S D 03溝出土。42は復元口径8.6cm、器高1.4cm、S E 10井戸跡出土。43は復元口径9.6cm、器高1.4cm、S E 02井戸跡出土。44は復元口径9cm、器高1.4cm、S E 09井戸跡出土。

椀 (Fig. 9-45・46)

内湾しながら外側に開く体部がつく。45は口縁部がわずかに外反する。高台は外側に開き、低く安定している。45は体部内外面ヨコナデ、底部内外面はナデである。口径13.2cm、高台径8cm、器高5.3cm、S S 01貝層出土。46は体部内外面ヨコナデ、底部内外面ナデ、板状圧痕が残る。高台径9.2cm、残存器高4.7cm、S X 01出土。

内黒土器 (Fig. 9-47・48)

椀である。内湾しながら立ち上がる体部をもち、細く高い高台がつく。47は口縁端部は丸みをもつ。口縁部および底部外面はヨコナデ、底部内面ナデ、体部外面下半はヘラケズリである。復元口径13.8cm、高台径8cm、器高5.95cm、48は底部内面がヘラミガキとナデ、外面はヨコナデで板状圧痕が残る。高台径6.8cm、残存器高3.4cm、47・48ともS S 02貝層出土。

黒色土器 (Fig. 9-49~51)

椀 (49・50) 49は底部で、外に開く高台がつく。内外面ともナデ、高台はヨコナデである。底部外面にヘラ記号がある。高台径7.5cm、残存器高1.6cm、S E 12井戸跡出土。50は体部外面ヨコナデ、外面下半はヘラケズリ、内面はヘラミガキである。復元口径18.2cm、残存器高6.3cm、S S 01貝層出土。

杯 (51) 体部と底部の境が不明瞭で、平底に内湾しながら開く体部がつき、口縁端部は丸みをもつ。口縁部および体部外面はヨコナデ、内面はナデ、底部外面はヘラケズリ後ナデである。口径15.4cm、器高3.9cm、S E 13井戸跡出土。

(3)瓦器 (Fig. 9-52~62、10-63~70、PL. 12・13)

小皿と椀がある。

小皿 (52~54)

平底あるいはやや丸みをもつ平底に、短く開く体部がつくものである。52は口縁部と底部の境は不明瞭で、底部は丸みをもつ。内面および口縁部外面はヨコナデの後ヘラミガキ、底部外面はナデで板状圧痕が残る。口径10.4cm、器高2.2cm、S D 01溝出土。53は内面ナデ、体部外面はヘラミガキ、糸切り離しである。口径10cm、器高2.2cm、S X 01出土。54は口縁端部が丸みを

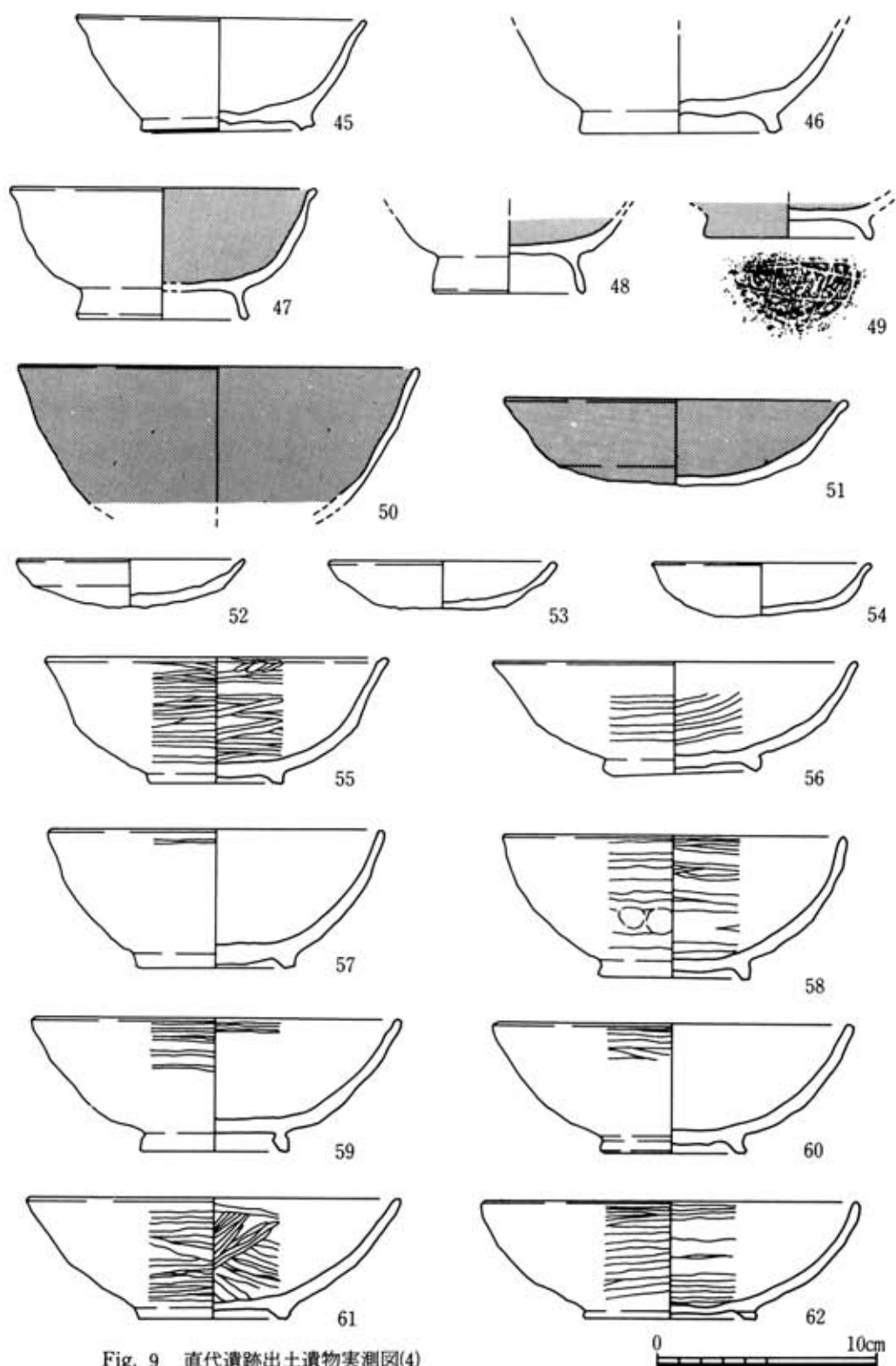


Fig. 9 直代遺跡出土遺物実測図(4)

もつ。口縁部はヨコナデ、底部内面はナデである。口径9.8cm、器高2.5cm、S E 08井戸跡出土。

碗 (55~70)

内湾しながら外へ開く体部をもち、形態、法量、成形等に若干の差異が認められる。

55・56は低く安定した高台をもち、体部は内湾しながら外に開き、口縁部はわずかに外反する。体部中位に屈曲部があり、この点に他の碗との相違がみられる。55は内外面ともヘラミガキ、底部外面に板状圧痕が残る。復元口径15.7cm、高台径6cm、器高5.7cm、S D 01溝出土。56は内外面ともヘラミガキ、体部外面下位 $\frac{1}{4}$ はナデである。口径16.4cm、高台径7.1cm、器高5.2cm、S E 13井戸跡出土。

57・58は器高が高いため、体部が他の碗より内湾している。57は体部内外面はヘラミガキ、底部内面はナデである。復元口径13.2cm、高台径7.2cm、器高6.2cm、S D 01溝出土。58は内外面ヘラミガキだが、体部外面下位に指頭圧痕が残る。口径15.4cm、高台径6.9cm、器高6.5cm、S E 09井戸跡出土。

59~70は体部が大きく開くもので、なかでも63~70は口径と高台径の差が大きく不安定な感を与える。59~62はやや外方に張り出す高台がつく。59は口縁部ヘラミガキ、体部内外面はナデの後粗いヘラミガキである。復元口径16.6cm、高台径6.8cm、器高6cm、S E 05井戸跡出土。60~62は内外面ヘラミガキである。60は口径15.9cm、高台径6.6cm、器高5.9cm、S E 07井戸跡出土。61は復元口径17.1cm、高台径6.8cm、器高5.5cm、S D 01溝出土。62は復元口径17cm、高台径7.9cm、器高5.3cm、S E 08井戸跡出土。63は内外面ヘラミガキだが、体部外面下位 $\frac{1}{4}$ はナデである。復元口径15.8cm、高台径5.9cm、表土出土。64は磨耗が激しいが、内外面ともヘラミガキである。口径15.2cm、高台径6.8cm、器高5.7cm、S E 10井戸跡出土。65~70は内面はナデまたは粗いヘラミガキ、外面は口縁部がヘラミガキだが、体部下半は部分的なヘラミガキやヘラケズリのままで指頭圧痕が目立ち、造りは粗雑である。65は体部外面には指頭圧痕が残り、体部中位まで粗いヘラミガキを施している。内面はナデである。口径15.8cm、高台径6.4cm、器高5.6cm、66は口縁部および内面はヘラミガキ、体部外面下半は部分的に粗いヘラミガキである。復元口径15.8cm、高台径5.6cm、器高5.5cm、S E 08井戸跡出土。67は口縁部および内面はヘラミガキ、体部外面下半はヘラケズリ後ナデで指頭圧痕が残る。復元口径17.4cm、高台径6.6cm、器高6cm、S D 01溝出土。68は口縁部がヨコナデ、内面および体部外面下半はナデである。口径17cm、高台径7cm、器高5.4cm、S E 03井戸跡出土。69は口縁部がヘラミガキ、体部内外面は粗いヘラミガキを施している。口径17.4cm、高台径6.6cm、器高5.8cm、S E 14井戸跡出土。70は口縁部および内面はヘラミガキ、体部外面は指頭圧痕が著しく残り、部分的にヘラミガキを施している。復元口径16.4cm、高台径6.9cm、器高5.2cm、S D 01溝出土。

(4)白磁 (Fig. 10-71~77、PL. 13)

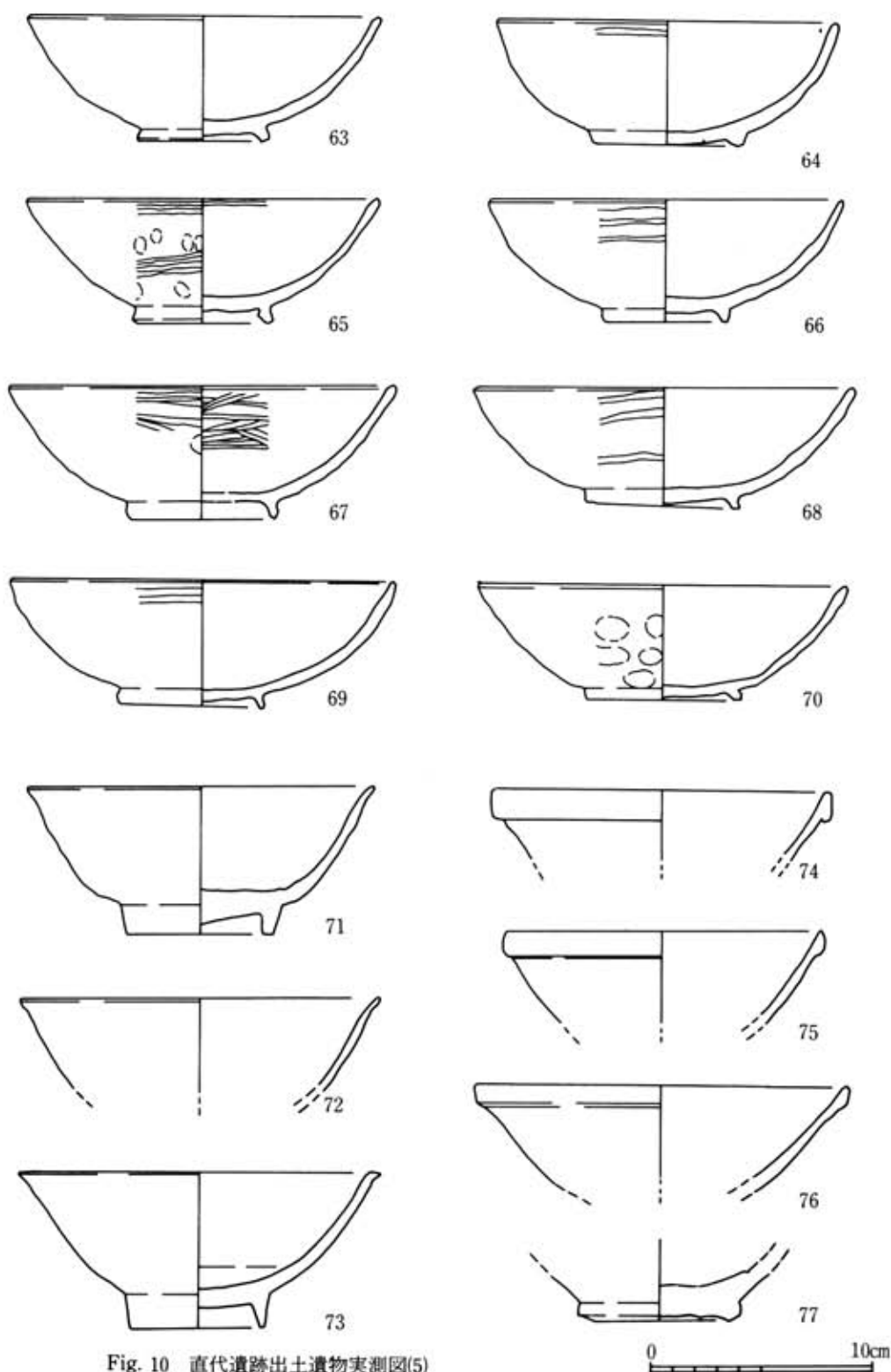


Fig. 10 直代遺跡出土遺物実測図(5)

碗である。内湾しながら外に開き、口縁部がやや外反するもの(71~73)と玉縁状のもの(74~77)とがみられる。

71~73は口縁部が外反するもので、細く高い高台がつく。内面に細い一条の沈線をめぐらしている。71は灰白色の釉がかかり、高台部は露胎である。復元口径15.8cm、器高6.6cm。72は灰白色の釉がかかる。復元口径16.2cm、残存器高4.2cm。71・72ともS D01溝出土。73はやや緑がかった灰白色の釉がかかり、高台部は露胎である。口径16.4cm、器高7cm、表土出土。

74~76は玉縁口縁のもので、77はこれにつく底部である。釉はやや緑がかった灰白色である。74は復元口径15cm、残存器高3.1cm、75は復元口径14.2cm、残存器高4.2cm、76は復元口径16.8cm、残存器高4.7cm、74~76ともS D01溝出土。77は高台内側の削りが浅い。内面には釉がかかるが、外面は露胎である。高台径7.3cm。

(5)須恵器 (Fig. 11・12、PL. 12・14)

杯、平瓶、壺、甕がある。

杯蓋 (Fig. 11-78~85)

口縁部内面にかえりがなく、天井部中央につまみがないもの(78~83)、口縁部内面にかえりがあり、天井部中央につまみが見つからないもの(84)、口縁部内面にかえりがなく、天井部中央につまみがつくもの(85)がある。

78は天井部が平坦で、内湾しつつ下外方にのびて口縁部で直立する。端部はやや尖る。口径12.8cm、器高4.0cm、S S 05貝層出土。79は天井部が丸く、内湾しつつ下外方にのびる。口縁部はやや開き、端部は丸くおさまる。口径13.2cm、器高4.0cm、S X 01出土。80は天井部が丸く、内湾しつつ下外方にのびる。口縁部はやや開き、端部はやや尖る。天井部にヘラ記号がある。復元口径11.4cm、器高3.7cm、S S 06貝層出土。81は天井部が丸く、内湾しつつ下外方にのびて口縁部で直立する。端部は丸くおさまる。天井部外面にヘラ記号がある。口径12.4cm、器高9.0cm、表土出土。

82は天井部が丸く、内湾しつつ下外方にのびる。口縁部は最も開き、端部は丸くおさまる。復元口径11.6cm、器高6.8cm、S D 03溝出土。83は天井部がやや平坦で、内湾しつつ下外方にのびて口縁部で直立する。端部はやや尖る。口径12.6cm、器高3.8cm、表土出土。78~83はいずれも天井部の外面 $\frac{1}{2}$ ほどがヘラケズリ、内面 $\frac{1}{2}$ ほどがナデ、他はヨコナデである。

84は天井部が低くやや丸みを持ち、内湾しつつ下外方にのびて口縁部をなす。口縁端部は丸く、内傾するかえりがつく。かえりは口縁端部より下に出る。天井部の外面 $\frac{1}{2}$ はヘラケズリ、内面はナデ、他はヨコナデ。天井部外面にヘラ記号がある。口径7.8cm、器高2.1cmで小型である。表土出土。

85は天井部が低く広い平坦面で、やや内湾するが直線的に下外方にのびる。口縁部は短く直

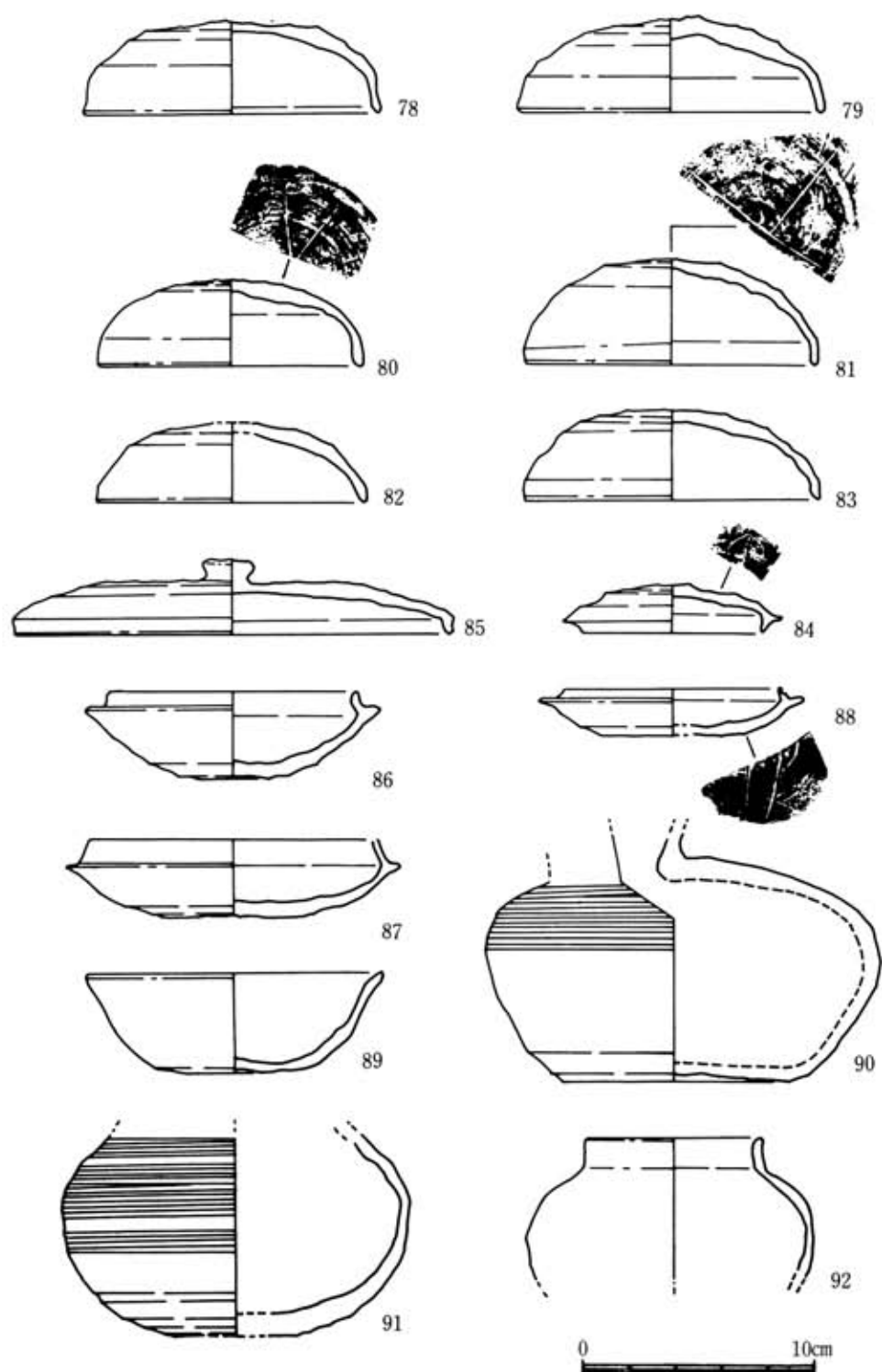


Fig. 11 直代遺跡出土遺物実測図(6)

立する。端部は丸い。天井部中央に扁平で中心部がわずかに突出するつまみがつく。天井部の外面はヘラケズリ、内面ナデ、他はヨコナデ。口径18.8cm、器高2.4cm、S E 01井戸跡出土。

杯 (Fig. 11-86~89)

口縁部内面に立ち上がりがあるもの(86~88)、ないもの(89)がある。

86は底部が丸く、内湾しつつ上外方にのびる。受部は水平に短くつく。立ち上がりはやや外反ぎみに内傾する。端部はともに丸い。底部外面はヘラケズリ、内面はナデ、他はヨコナデ。口径10.8cm、器高3.8cm、立ち上がり高0.7cm、S E 05井戸跡出土。87は底部が浅く広い平坦面で、やや内湾しつつ上外方にのびる。受部は水平に短くつく。立ち上がりは長くやや反りぎみに内傾する。端部はともに丸い。底部外面はヘラケズリ、内面はナデ、他はヨコナデ。口径12.4cm、器高3.2cm、立ち上がり高1.1cm、S S 04貝層出土。88は底部が浅く平坦で、内湾しつつ上外方にのびる。受部は上外方に張り出す。立ち上がりは短く内傾し、尖る。底部外面はヘラ切離し後ナデ、内面はナデ、他はヨコナデ。復元口径9.2cm、器高2.0cm、立ち上がり高0.5cm、S E 11井戸跡出土。

89は底部がやや上げ底ぎみの平底で、上外方に外反しながら開く体部がつく。底部と体部の境はやや角張る。底部外面に「田」の字を墨書を施す。底部外面はナデ、他はヨコナデ。口径12.8cm、器高4.3cm、S E 12井戸跡出土。

平瓶 (Fig. 11-90)

90は平瓶であるが、口縁部を欠く。やや上げ底の平坦な底部に丸みをもつが扁平な体部がつく。口縁部は体部の中心から外れてつく。底部外面はナデ、体部外面下半はヘラケズリ、ナデ、上半はカキメ、口縁部は内外面ともヨコナデ。底径9.8cm、現存器高10.6cm、S S 05貝層出土。

壺 (Fig. 11-91・92、12-95)

91はやや丸みをもつ平底に、球形の体部がつく。底部の器壁は厚い。口頸部を欠く。底部外面はヘラケズリ、胴部の外面下半はヘラケズリ、ナデ、上半はカキメ、他はヨコナデ。S S 03貝層出土。92は胴部下半を欠くが、胴部上半は球形である。口頸部は上方にやや外反しながら、短くつく。全面ヨコナデ。口径7.4cm、S E 05井戸跡出土。95は胴部下半を欠くが、胴部上半は球形である。口頸部は大きく外反して上方にのびる。口縁端部は逆「く」字形に上方に短く屈曲して丸くおさまる。体部外面はカキメ、他はヨコナデ。口径10.8cm、S S 03貝層出土。

大甕 (Fig. 12-93・94・96)

すべて胴部下半を欠く。

93は肩部が大きく張った体部に、上外方に直線的に開く口頸部がつく。体部と口頸部の境は強く屈曲する。口縁部は外方に肥厚し段をなす。体部外面は格子目タタキ、内面は同心円文、他はヨコナデ。口径20.0cm、S S 02貝層出土。94は丸みのある球形の体部に、上外方に大きく外反し開く口頸部がつく。体部と口頸部の境は、屈曲が弱く曲線的である。口縁部は肥厚し

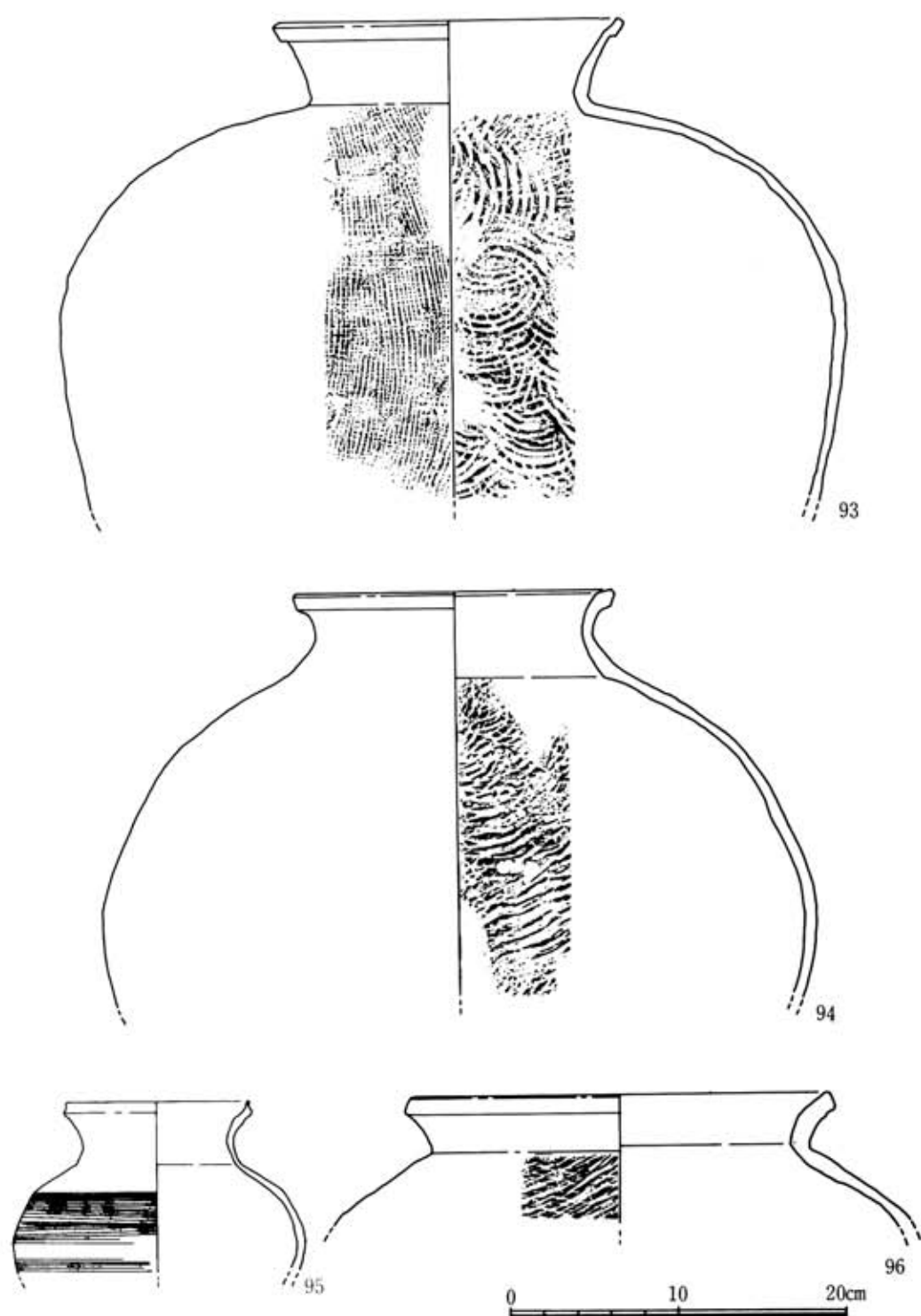


Fig. 12 直代遺跡出土遺物実測図(7)

ない。体部外面は格子目タタキ、内面は同心円文、他はヨコナデ。口径18.8cm、表土出土。96は丸みのある体部にやや外反しながら大きく開く口頸部がつく。体部と口頸部の境は強く屈曲し、「く」字形である。口頸部は肥厚し短い。口縁部は段をなさない。体部外面はタタキ、内面はナデ、他はヨコナデ。口径24.8cm、S E10井戸跡出土。

(6)その他の遺物 (Fig. 13、P.L. 15)

調査区ではその他に、木製品 (97~100) や石製品 (101~103) が出土した。

木製品 97は下駄であるが、半分近くを欠く。台部は長楕円形で、全長22.4cm、復元幅11.6cm、厚1.8cm。また、歯は高さ2.2cm、復元幅12.0cm、厚3.0cm。緒穴は前歯前方中央に1孔、後歯前方左右に2孔を穿っているようである。前緒穴は外側に、後緒穴は内側に向けている。台部裏面、歯部に刀子の整形痕が残る。S D01溝出土。98・99は柁目の板片であるが、ともに小さな孔をいくつか穿っている。何に使ったかは不明。98は幅5.9cm、厚0.5cm。99は長さ18.6cm、幅2.6cm、厚0.5cm。ともにS E16井戸跡出土。100は一木造りの柄杓である。浅い皿形の容器に長い柄がつく。杓部は幅7.5cm、厚1.2cm、柄部は長さ25.0cm、断面1.5cm×2.3cmの長方形であるが、柄端部から9.0cmのところで大きく「く」字形に屈曲する。S D01溝出土。

石製品 101は砂岩製の砥石である。二面が大きく擦り減っている。長さ15.0cm、幅5.4cm、断面長方形。S S02貝層出土。102は石庖丁である。半月形で背部に2孔を穿つ。S S05貝層出土。103は滑石製の石鍋である。口縁部は平坦で、体部はやや内湾しながら下方へまっすぐのびる。底部は欠くが、体部との境は角張る。縦長の把手が体部につく。内外面とも削り痕が残る。S E10井戸跡出土。

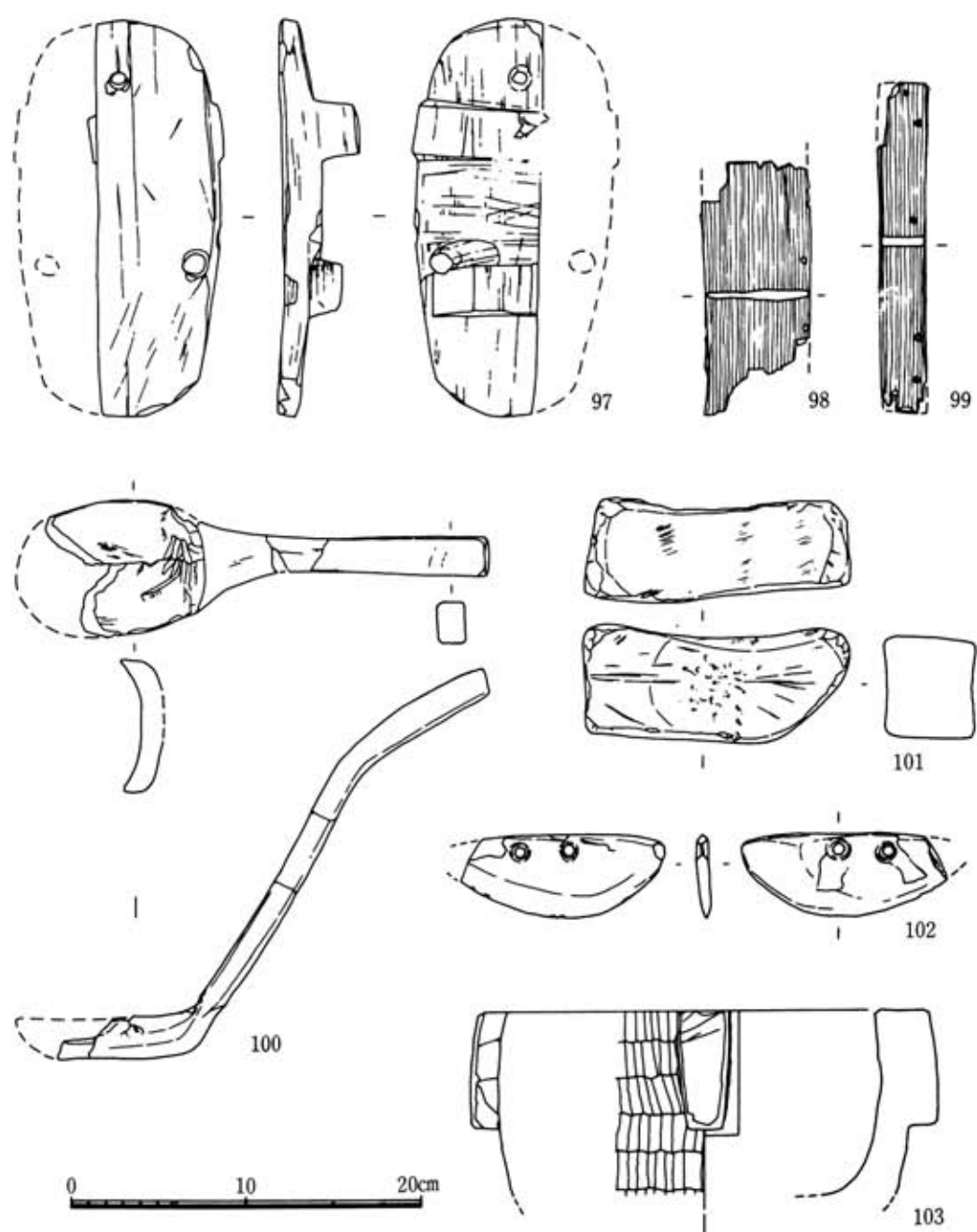


Fig. 13 直代遺跡出土遺物実測図(8)

Ⅲ ま と め

今回の調査で検出した遺構は、井戸跡、掘立柱建物跡、溝、土壇、小穴群、それに貝層である。非戸跡は素掘りのものと割り抜きの木枠をもつものの二通りであるが、いずれも規模的には小さい。ただ、検出した遺構のなかでは、数的に最も多い。掘立柱建物跡は4棟であるが、これも規模的には小さく、柱穴の柱根もほとんど残存しない。溝ではS D01にその中央付近を横断するように打ち並べられた杭があり、柵状の構造となっているが特徴的である。貝層は周辺の三根町本分貝塚や千代田町詫田貝塚などでみられるような、貝類の厚い堆積はなく、ただ広く貝類が散乱しているというものである。以上のように、この調査区の遺構で他と比して特徴となるものはほとんどない。むしろ、本遺跡や菰ノ江遺跡などのような佐賀平野南部の低湿地帯では、井戸跡や溝が多く存在するのが一般的な存り方ではないかということを想起させている。

そして、本遺跡では遺構よりも遺物の方が注目されよう。遺物は、土師器、須恵器、瓦器、磁器、木製品、石製品などであるが、そのなかで土師器と瓦器の出土が最も多い。特に瓦器には完形品が多い。

須恵器は杯、甕、平瓶が出土している。遺構が少ないので、それとの詳述は避けるが、時期としては古墳時代後半のものが主である。奈良時代前半のものも少しある。

土師器は器台、甕、壺、小皿、碗などが出土している。甕、壺は須恵器と同じ時期であるが、器台はこの遺跡で最も古い遺物で古墳時代中ごろが考えられる。小皿、碗は瓦器の方と同じ時期である。

瓦器は井戸跡から完形品が多く出土している。井戸の深いところからであり、流れ込みとは考えられないので、完形品ということからも、何か水に関連した儀礼が行われたのかもしれない。本遺跡より南に位置し、同じように井戸跡を多く検出した菰ノ江遺跡では、やはり井戸跡内部から完形の土師器の小皿が多数出土している。瓦器の時期は、一部に12世紀初頭のものがみられるが、ほとんどは12世紀末から13世紀初めにかけてのものである。

木製品のうち、柄杓は県内では三日月町土生遺跡や千代田町詫田西分遺跡で発見されているが、中世のものとしては初めてであろう。

このように、本遺跡は遺構、遺物からみて、中世を中心とする遺跡である。中世においては、この遺跡のすぐ北の「寄人」という地名が、『河上宮造用途支配惣田数注文』正応5年(1292)の史料にみられる。このことから、本遺跡も中世荘園制における「寄人」の一端を示すものとして、考えられる。しかし、県内では、中世の遺跡の調査は少なく、ようやく端緒についたばかりである。今後は本遺跡のような集落周辺の遺跡から、さらに集落遺跡へと調査を進める必要がある。

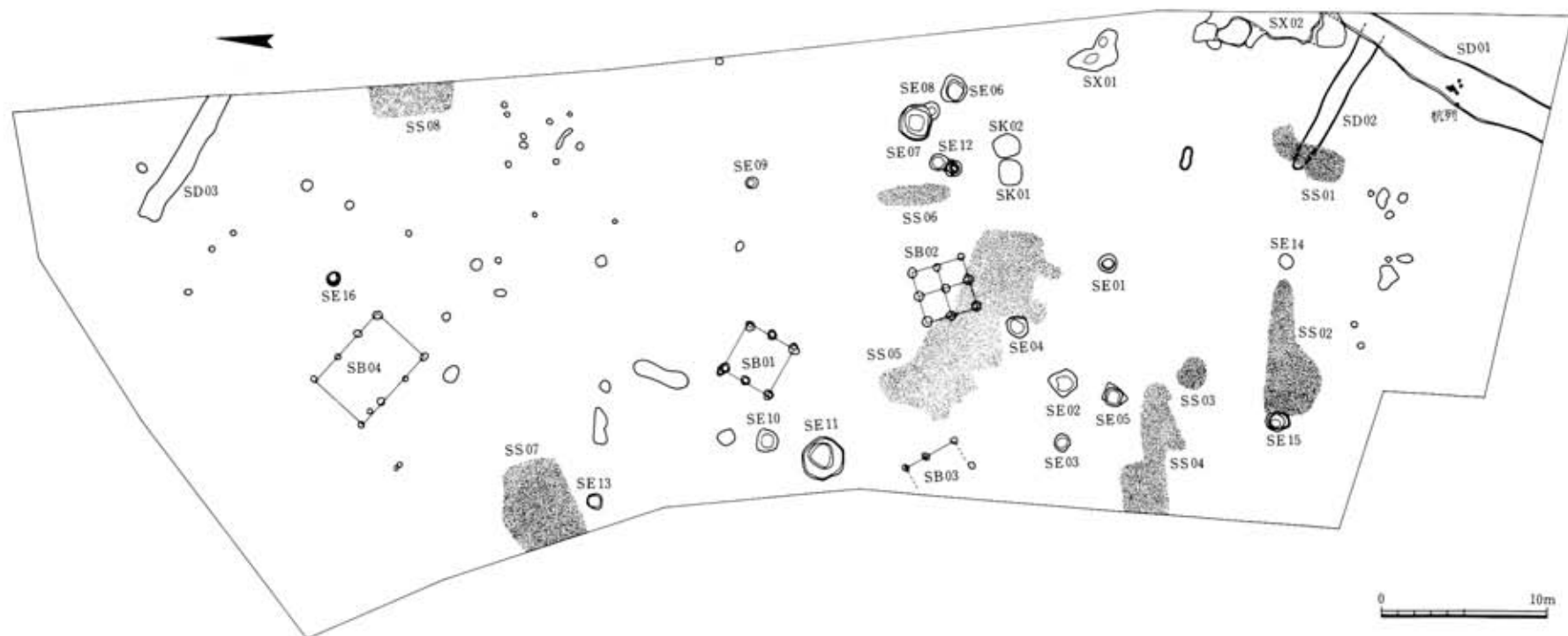
資料の保管

出土遺物・遺構実測図・遺物実測図・遺構写真・遺物写真・トレース図などについては佐賀県教育委員会文化課文化財資料室（佐賀市水ヶ江一丁目12番9号、佐賀県庁東別館内、電話0952（23）4537）で、保管・管理している。このための資料として遺物実測図（遺物登録番号は別表）・遺構写真・遺物写真の登録番号を記して検索の便としたい。なお、遺物実測図については $\frac{1}{2}$ に縮図したものを、写真についてはベタ焼きしたものをカード化している。

- (1) 遺構実測図登録番号 002619～002643
- (2) 遺物実測図登録番号 003865～003888、004073～004075
- (3) 遺構写真登録番号 (35mm) 810216・810227～810230、810234・810235
(6×7) 811587～811613・811653～811660・811718～811721
- (4) 遺物写真登録番号 (6×7) 821198～821287
(4×5) 824178～824195

挿図一遺物登録番号対照表

Fig.番号	遺構名	遺物番号	Fig.番号	遺構名	遺物番号	Fig.番号	遺構名	遺物番号
Fig. 6-1	S S 07	82004178	Fig. 8-36	S E 06	82002982	Fig.10-71	S D 01	82004112
2	S E 04	2974	37	S E 06	2983	72	S D 01	4117
3	S S 05	4166	38	S E 10	2994	73	B地区	4173
4	S E 11	4102	39	S E 07	2986	74	S D 01	4116
5	S S 05	4165	40	S E 07	2987	75	S D 01	4114
6	S S 04	4159	41	S D 03	4135	76	S D 01	4115
7	S X 01	4146	42	S E 10	2993	77	S D 02	4134
8	S X 01	4147	43	S E 02	2971	Fig.11-78	S S 05	4160
9	S X 01	3950	44	S E 09	4191	79	S X 01	4149
10	S S 01	4153	Fig. 9-45	S S 01	4151	80	S S 06	4168
11	S S 07	4181	46	S X 01	4141	81	表土	4184
Fig. 7-12	S S 05	4163	47	S S 02	4195	82	S D 03	4133
13	表土	4183	48	S S 02	4196	83	表土	4401
14	S S 03	4154	49	S E 12	4108	84	表土	4402
15	A地区	4182	50	S S 01	4152	85	S E 01	2970
16	S S 05	4167	51	S E 13	4106	86	S E 05	2978
17	表土	4175	52	S D 01	4119	87	S S 04	4158
18	S S 05	4162	53	S X 01	4144	88	S E 11	2999
19	S D 03	4132	54	S E 08	2989	89	S E 12	4174
20	S S 02F	4198	55	S D 01	4120	90	S S 05	4171
21	S E 16	4136	56	S E 13	4105	91	S S 03	4155
Fig. 8-22	S E 01	2969	57	S D 01	4127	92	S E 05	2977
23	S S 05	4161	58	S E 09	2990	Fig.12-93	S S 02	4169
24	S S 07	4189	59	S E 05	2975	94	表土	4170
25	S S 03	4156	60	S E 07	2984	95	S S 03	4186
26	S S 03	4157	61	S D 01	4124	96	S E 10	2998
27	表土	4176	62	S E 08	2988	Fig.13-97	S D 01	4408
28	S X 01	4142	Fig.10-63	表土	4177	98	S E 16	4404
29	S X 01	4143	64	S E 10	4199	99	S E 16	4405
30	S E 09	4192	65	S E 06	2979	100	S E 08	4407
31	S X 01	4140	66	S E 08	2980	101	S S 02	4190
32	S E 07	2985	67	S D 01	4121	102	S S 05	4180
33	S D 03	4134	68	S E 03	2972	103	S E 10	2997
34	S S 01	4150	69	S E 14	4194			
35	S D 01	4118	70	S D 01	4129			



PLAN. 1 直代遺跡遺構配置図

圖 版

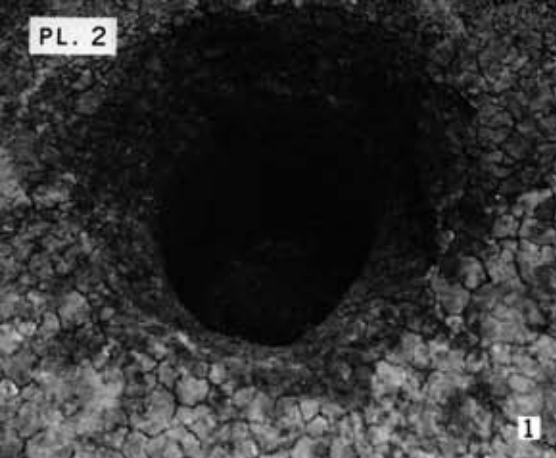


1



2

1. 遺跡遠景<南から> 2. 遺跡全景<南から>



1



5



2



6



3



7

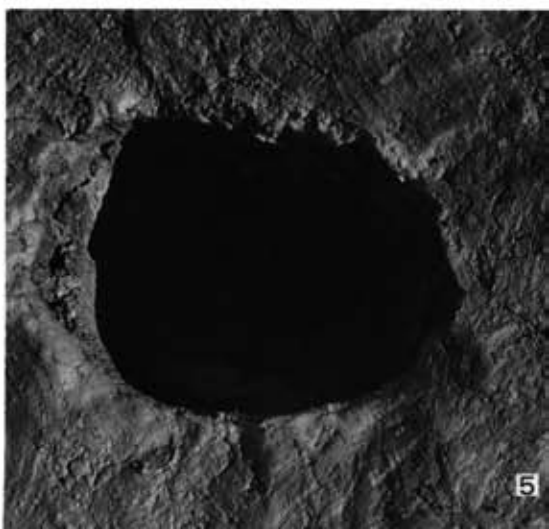
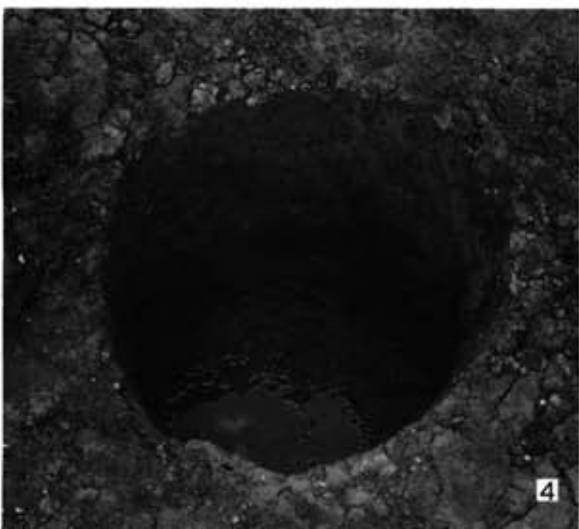
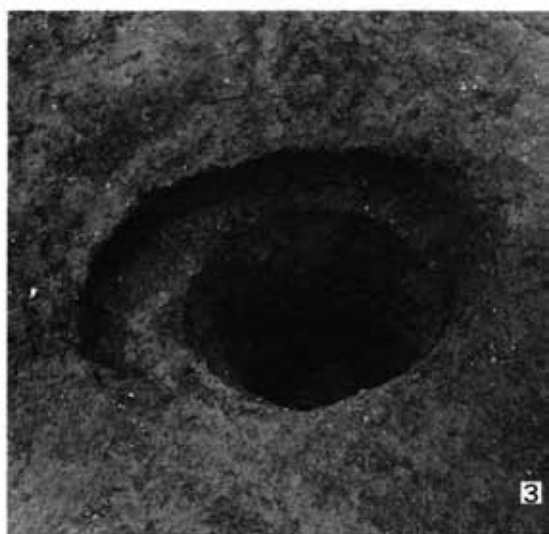
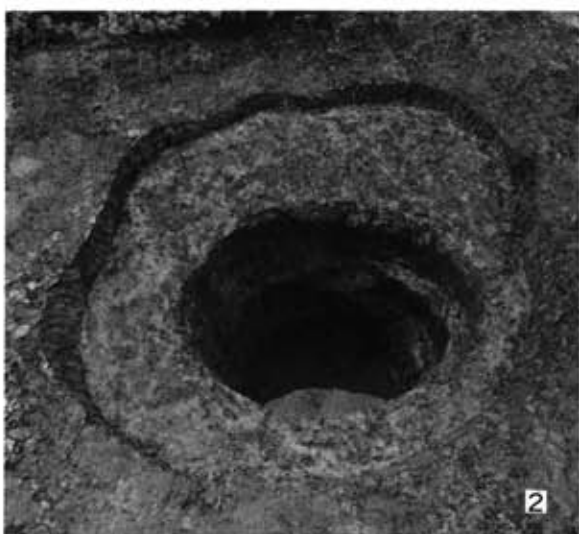


4

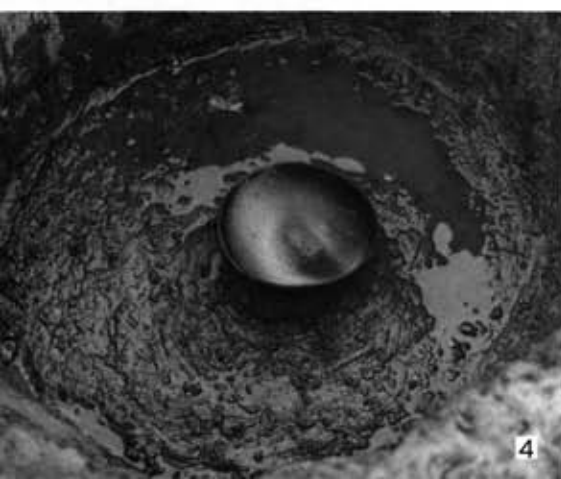


8

1. SE01井戸跡
2. SE02井戸跡
3. SE03井戸跡
4. SE04井戸跡
5. SE05井戸跡
6. SE08井戸跡
7. SE09井戸跡
8. SE10井戸跡



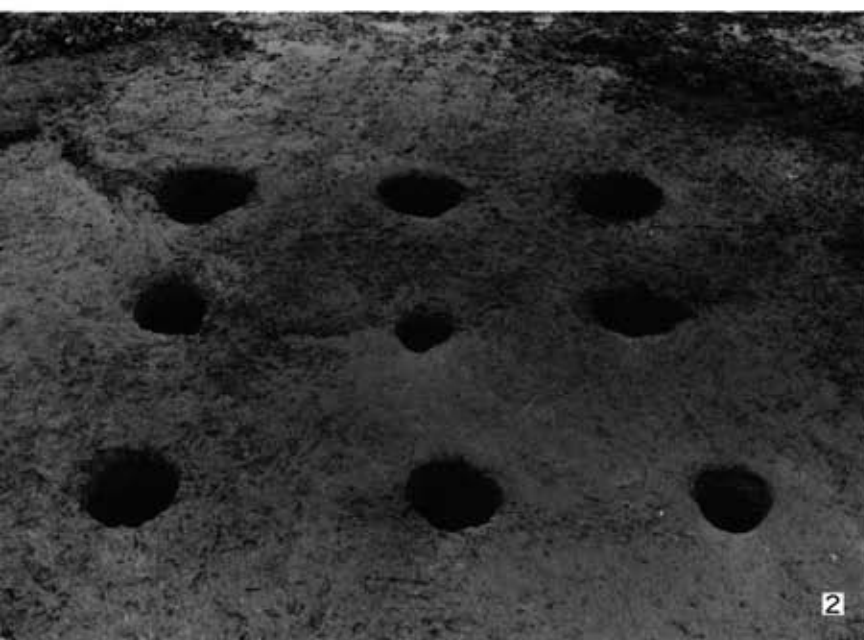
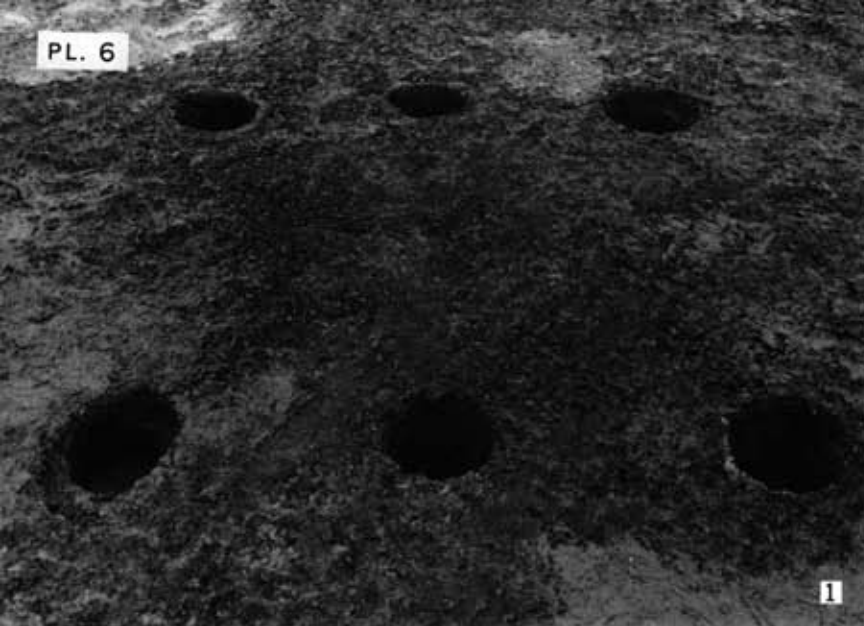
1. SE07(右)、SE
12(左)井戸跡
2. SE11井戸跡
3. SE14井戸跡
4. SE15井戸跡
5. SE16井戸跡



1. SE01井戸跡
遺物出土状況
2. SE07井戸跡
遺物出土状況
3. 同
4. SE09井戸跡
遺物出土状況
5. SE12井戸跡
遺物出土状況
6. SE14井戸跡
遺物出土状況
7. SE16井戸跡
遺物出土状況
8. 同



1.~3. S E16井戸跡(井戸梓)



1. S B01建物跡<北西から>
2. S B02建物跡<南から>
3. S B04建物跡<北西から>



1



2



3

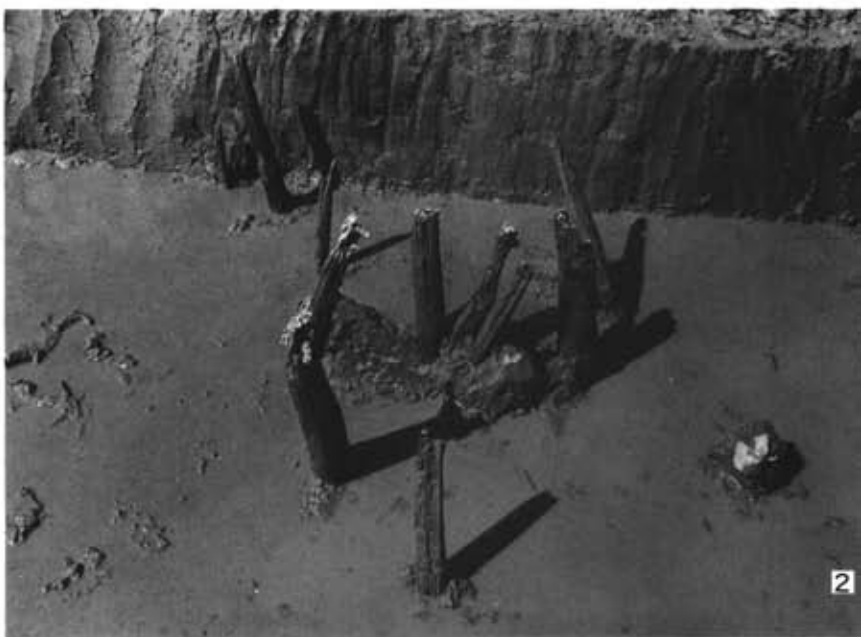
1. S X02不明遺構<西から>
2. 同 <南から>
3. S K01(左)、S K02(右)
土壇<南から>



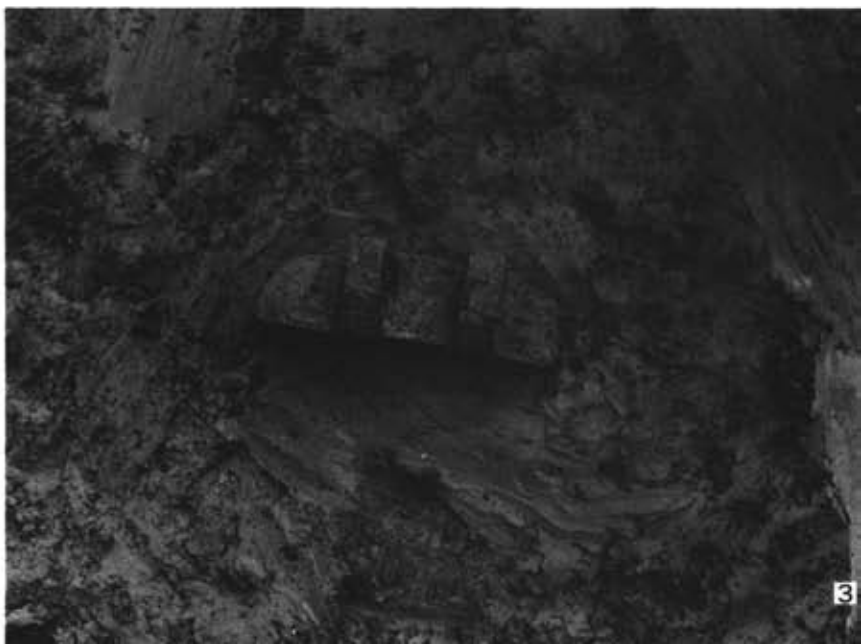
1. S D01溝〈北東から〉 2. 同 〈南から〉



1



2



3

1. SD03溝<北東から>
2. SD01溝(杭列)<東から>
3. 同 遺物出土状況(下駄)



1. SS02貝層
2. 同
3. SS03貝層



1. S S 02貝層遺物出土状況
2. 同
3. S S 05貝層遺物出土状況



8



19



27



11



32



38



51



52



53



54



21



15

- 8. 53. S X01出土土師器
- 11. S S07出土土師器
- 21. S E06出土須惠器
- 15. 表土出土土師器
- 19. S D03出土土師器
- 27. 表土出土土師器
- 32. S E07出土土師器
- 38. S E10出土土師器
- 51. S E13出土黑色土器
- 52. S D01出土瓦器
- 52. S E08出土瓦器
- 54. S E08出土瓦器



55



64



56



65



57



67



58



68



59



69



60



71



63



73

55, 57, 67. S D01出土瓦器
56. S E13出土瓦器
58. S E09出土瓦器
59. S E05出土瓦器
60. S E07出土瓦器
63. 表土 出土瓦器

64. S E10出土瓦器
65. S E06出土瓦器
68. S E03出土瓦器
69. S E14出土瓦器
71. S D01出土白磁
73. 表土 出土白磁



78



79



84



85



86



89-1



89-2



90



92



95



93



94

78. 90. S S 05出土須恵器

79. S X 01出土須恵器

84. 94. 表土出土須恵器

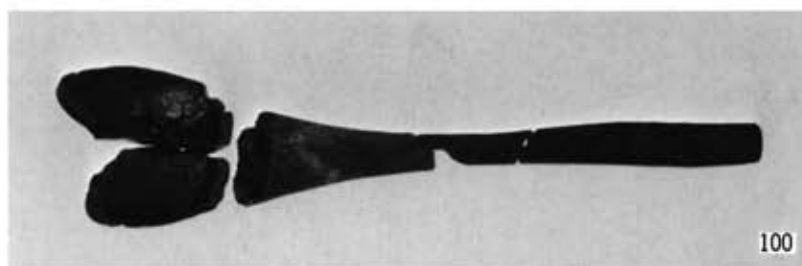
85. S E 01出土須恵器

86. 92. S E 05出土須恵器

89. -1 S E 12出土須恵器

89. -2 同 底部墨書

93. 95. S S 03出土須恵器



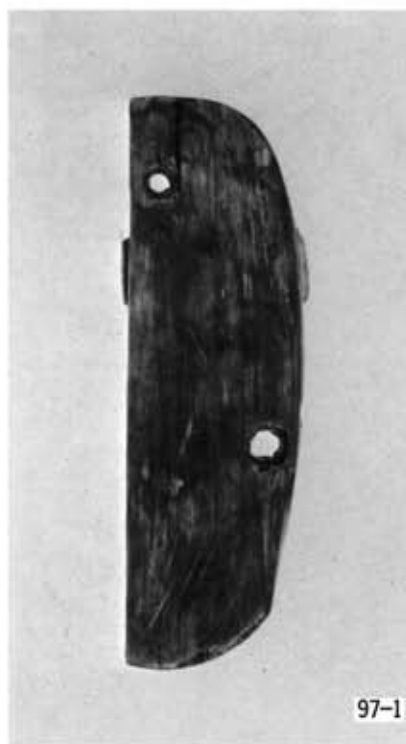
100



98



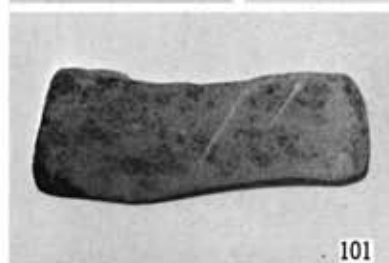
99



97-1



97-2



101



102

97-1 S D01出土下駄表面
-2 同 裏面
98, 99. S E16出土木製品
100. S E08出土柄杓

101. S S02出土砥石
102. S S05出土石庖丁

佐賀県文化財調査報告書第67集

直 代 遺 跡

昭和58年3月31日発行

発 行 佐賀県教育委員会
佐賀市城内一丁目

印 刷 佐 賀 印 刷 社
佐賀市高木瀬町長瀬1136-59

